

森に学び 林業を知る

地域の担い手を育てる

林研活動情報集



令和2年度
多様な担い手
育成事業



全国林業研究グループ連絡協議会

森に学び 林業を知る

地域の担い手を育てる 林研活動情報集

令和2年度
多様な担い手
育成事業



全国林業研究グループ連絡協議会

まえがき

令

和2年度は、新型コロナウイルスにより、社会全体が大きく変化しました。テレワークの普及により人口が密集する都市部を離れ、あえて自然豊かな地方で暮らす選択も注目される一方、地方の若者とすれば、コロナ禍の大都市を目指すのではなく、地元で自然を相手にした仕事を選ぶという選択も増えてきます。いま、改めて林業への関心が高まることが期待されます。

そのようななかで、私たち全国の林業研究グループメンバーが、この流れを活かし、いかに地域の若者たちに林業を知ってもらい、仕事として認識してもらえるかどうかということが重要ではないでしょうか。例えば、林業の仕事の魅力を伝え、就業希望者のすそ野を広げ、現場での技術指導等を通じて林業教育を支援するなど、私たち林研グループだからできる様々な活動があります。

このたびも、これからの林業を支える人材育成に寄与するため、一丸となって多様な担い手育成事業を推進する運動を繰り広げてくださいました。地域の林業後継者や将来を担う未来の就業者、新たに林業に就業したい人々、そして女性に向けた様々な支援活動です。

今年度の運動では、高校生や大学生など若い層を対象としたインターンシップ、林業経営・就業体験、林業技術研修などを実践してきました。地域の林業全般に関わる様々な業種にじかに触れ、就業先の選択の1つとして林業という仕事の魅力を心に刻んでもらうことができました。

また、女性の林業就業を支援する活動も全国に広がりました。体力面での男女差を考慮するなかで、林研グループの活動から、安全に、無理なく働ける就業環境づくりの工夫やアイデアが生まれ、男

女共通の魅力ある職場づくりに寄与する成果も生まれています。

このような全国での支援活動は、私たちの仲間だけで実行できるものではありません。高校や大学等、地域の教育関係者、そして技術指導などを支援する林業関係者の方々の理解と協力を得て、はじめて効果のある活動づくりが可能になります。

本書は、後継者の育成支援、林業就業促進支援等はもちろん、林研グループ等の活動、さらには地域の仕事創出支援に欠かせない生産技術や流通・販売ノウハウ等を実践事例から紹介しました。

机上では得られない実践のためのノウハウ、ヒントの数々が盛り込まれています。活動を振り返り、また今後の全国キャンペーンをいっそう実り多いものにするために、ぜひ本書を役立てていただければ幸いです。

本書の取りまとめに当たりましては、林業関係高校、大学校等教育機関、都道府県林業普及指導員、市町村、森林組合、森林所有者のみなさん、全国林業改良普及協会ほか、大勢の方々のご協力をいただきました。深く感謝いたします。

令和3年3月

全国林業研究グループ連絡協議会

会長 齋藤 正

まえがき…………… 3

第1部 森林と林業の仕事を伝える

北海道の森林・林業、木材産業で活躍する人材育成を目指して

北海道林業グループ協議会「北海道」…………… 8

県内唯一の農林高校生に向けた

特用林産と林業機械の就業体験講習

山梨県林業研究グループ連絡協議会「山梨県」…………… 20

山に立つ木が家になるまで
10回の実習で体系的に学ぶ

仙南フォレストクラブ「宮城県」…………… 12

三重の森林を育む人づくり

高校生の森林調査・林業機械・労働安全体験

三重県林業研究グループ連絡協議会「三重県」…………… 24

マンツーマン指導で伝える
安全と技術

千葉県林業研究グループ連絡協議会「千葉県」…………… 16

森林の大切さを伝えて

林業・木材産業分野への就業を促進

山口県林業研究グループ連絡協議会「山口県」…………… 28

基本を学ぶ 女性林研会員の
作業道と林業経営、道具体験研修
特定非営利活動法人もりふれ倶楽部「島根県」……………32

額田林業の宝・ヒノキ無節材を
「高級内装材」として生かす！
額田林業クラブ「愛知県」……………40

チェーンソーで感動を！
伐木競技会で伝える山仕事の魅力と技
NPO法人ロゴース「群馬県」……………36

天下一品！ 佐治漆復活プロジェクトで
山村活性化
佐治町林業研究会「鳥取県」……………44

第2部 山づくり 人づくり ものづくり チャレンジ！

京築地域の森林・人づくりを実践するリーダー
京都森林研究グループ「福岡県」／中川準一さん……………50

原木シイタケ出荷制限の解除へ
中貫しいたけ研究会「茨城県」……………54

3Dプリンターで山のジオラマづくり
林業研究グループ「木の駅入口」「群馬県」……………52

一緒に山を歩いてくれた父に感謝。
Uターンで山を継ぎ、林研に加入
富来林業研究会「石川県」／大瀧俊定さん……………56

出張イベント

「ふるさとあったか便」

阿武町林業振興会「山口県」……………58

「炭焼き」やっています！

九度山町東部林研グループ「和歌山県」……………66

里山のあらゆる材を売れる商品に！

特定非営利活動法人バイオマス丹波篠山「兵庫県」……………60

コンテナ苗の生産・出荷

東黒川林業研究グループ「佐賀県」……………68

苗木生産研修会を開催

やつしろ林業研究グループ「熊本県」……………62

桜の葉と花で商品開発

一関地方森林組合室根婦人部 はなみずきの会「岩手県」…70

ハイバチの飼育・販売

付知町優良材生産研究会「岐阜県」……………64

令和2年度多様な担い手育成事業 実施グループ一覧……………72

林業研究グループ連絡協議会 事務局一覧……………74



第1部

森林と林業の
仕事を伝える

事

高校生等の林業就業促進支援

例

北海道の森林・林業、木材産業で活躍する人材育成を目指して



野ネズミ予察調査の実習で、森林室職員から野ネズミを捕獲するわなの設置方法を学ぶ生徒たち

北海道林業グループ協議会「北海道」

森林科学科の高校生を対象にインターンシップ等を毎年開催

北海道林業グループ協議会（会

長・山口敏男。以下、道協議会）は、

北海道内37の林研グループが加入

しています。会員数は435名で、

うち男性が398名、女性が37名
となっています。

各グループの人数は、4名から35名までと様々ですが、広大な北海道の各地で、地域の森林・林業、木材産業の活性化に向けた活動に取り組んでいます。

道協議会では毎年、林業に関する専門技術知識を習得してもらい、高校生の林業就業の促進を図ることを目的に、森林・林業に関するコースが設置されている道内3つの農業高等学校（岩見沢農業高等学校・旭川農業高等学校・帯広農業高等学校）の森林科学科の生徒を対象にインターンシップ（林業体験実習）を開催しています。

いずれのインターンシップも地域の道振興局、森林組合、林業事業体、林業家等の支援を受けて実施しています。

このうち、令和2年10月14日から16日の3日間、北海道上川総合



業務説明を聞く生徒たち

振興局南部森林室・林務課の全面的なご支援をいただき実施した、旭川農業高等学校森林科学科2年生の生徒を対象にしたインターンシップについて紹介します。

このインターンシップには、将来、林業関係の公務員や森林組合、林業事業体への就職を目指す12名（男子9名、女子3名）の生徒が参加しました。新型コロナウイルス感染症の拡大防止対策を徹底するとともに、現場での安全対策を

しっかりと行い、安全第一で講義や実習を実施しました。

将来の就業に向け、 林業現場の仕事を知る！

▼1日目

初日の10月14日、旭川市上川合同庁舎会議室および当麻町の民有林で、次の室内講義と現地実習が行われました。

- ① 北海道の林務行政について
- ② 森林室の業務説明
- ③ 林務課の業務説明
- ④ 造林事業の現地実習
- ⑤ 野ネズミ予察調査の実習



造林竣工検査の実習

午後からは、当麻町の民有林に移動して、造林事業の竣工検査実習と野ネズミの予察調査を行いました。造林事業竣工検査実習では植栽された苗木の規格、植栽本数、活着率などの実習を行い、この検査が造林補助金の査定に係る重要な業務であることを生徒たち

生徒たちは野ネズミを捕獲するためのわなを造林地内に仕掛けました。今回の調査では1日空けて3日目に捕獲した個体を回収して調べることにしました。3日目のわな回収時にたくさん野ネズミを捕獲できることを期待しながらバスで帰路につきました。



野ネズミ調査のわなを設置する

開会式の後、北海道が進めている百年先を見据えた林務行政や森林室・林務課の業務ついて、上川総合振興局南部森林室・林務課の職員から説明を受けました。

は実感していました。次に造林地の野ネズミ被害を最小限に抑える防除計画立案に必要な野ネズミ発生予察調査を行いました。



ハンディGPSを使った調査方法を学ぶ



ハンディGPSの操作説明を聞く

雨の中でGPS測量を開始 立木調査は雨で中止

▼2日目

10月15日は、当麻町の道有林に



正しい測樹方法を学ぶ

機器に登録し、次の地点に移動して登録を繰り返すだけで測量ができます。森林室職員から使い方の説明を受け、その後、班ごとに分かれて自分たちで測量を開始しました。

測量の実習を開始した時には雨が降り始め、雨具を着たなかでの作業となりましたが、それでも生徒たちは元気に測量をしていました。

実際に測量をしてみる

①GPS測量の実習
②立木調査（測樹）の実習

GPS測量は、ハンディGPS機器を使つての測量です。学校の実習で、巻き尺とポケットコンパスを使った「コンパス測量」を経験している生徒たちですが、ハンディGPSの測量は初めてです。コンパス測量だと最低2人以上の人員が必要で、傾斜やササの影響で見通しが悪い場合は作業効率が低下します。しかし、ハンディGPSだと測点に立つてその地点を

と、スピーディに作業が進み、「正確な測量が簡単にできる」と生徒たちは感心していました。

午後から予定していた立木調査は雨が強くなってきたため、安全性を考慮して現地での調査は中止とし、上川総合振興局庁舎の敷地内で実習を行うことになりました。

庁舎に戻り、森林室職員から胸高直径や樹高を測る輪尺やバーテ

ックスなどの調査用具の使い方について講義を受けました。生徒たちは改めて正しい測樹方法を学びました。

野ネズミ予察調査 わなの回収、 捕獲結果は？

▼3日目

最終日の10月16日は、生徒たちが楽しみにしていた野ネズミ予察調査わなの回収日です。前日の実習で調査し



野ネズミわなの回収作業

たGPS測量の野帳を整理し、保護事業の説明を室内で受けてから初日に仕掛けた50個のわなを回収するため現地に向かいました。

仕掛けたわなのうち、6個のわなに野ネズミがかかっています。6匹の野ネズミを捕獲することができました。しかし、生徒たちはもつと捕れることを期待していたようで、「わなの仕掛け方や場所が良くなかったのかな」と、振り返っていました。

気を取り直して、森林室職員が



捕獲した野ネズミを調査。
期待したほどは捕れず、やや残念な生徒たち



バードコールを作成。「鳥のさえずりが聞こえるよ」

らネズミの種類と判別方法の説明を受けました。捕獲したネズミを同定したところ、すべてが「エゾアカネズミ」で、造林木を食害する「エゾヤチネズミ」は捕獲できませんでした。造林木に被害を与える「エゾヤチネズミ」を捕獲することができていれば、防除方法を知る上での良い経験になっていたと思います。残念でした。

木工玩具の「バードコール」づくりを体験

現地実習を終了した後、上川総合振興局の駐車場倉庫でバードコールの作成を体験しました。

バードコールは鳥を呼ぶ（コールする）もので、太めの木の枝に差し込んだネジを回すと鳥の鳴き声に似た音色がでます。

木の枝をノコギリで切りドリルで穴をあけて金属のネジを差し込んで完成です。

生徒たちは、バードコールづくりを通じて「木育」活動の一端を知ることができたようです。

インターンシップを振り返って生徒の感想

バードコール作成後、会議室に戻り3日間のインターンシップの振り返りを行いました。

最後に生徒1人1人がインターンシップに参加した感想を述べ、「学校にはない道具や機器を使った実習で興味を持った」「将来の職業を決めるのに役立つ」「学校の授業では学べない貴重な経験になった」などの声が聞きました。

おわりに

今年度はコロナ禍にもかかわらずの開催ということで、実施できるかどうか心配されましたが、無事に3日間のインターンシップを終了することができました。

インターンシップを通じて、森林・林業、木材産業への就業機会の促進を図るとともに、実践的な技術や知識を習得することで、次世代の担い手の育成・確保を図ることにつながるものと考えます。

最後になりますが、この度のインターンシップに対するご支援・ご協力をいただきました北海道上川総合振興局南部森林室と産業振



3日間のインターンシップを振り返る

興部林務課の皆様へ感謝を申し上げます。

*まとめ
北海道林業グループ協議会

事

高校生等の林業就業促進支援

例

山に立つ木が家になるまで 10回の実習で体系的に学ぶ



南東北木材の鈴木賢二社長と柴田農林高校の生徒たち

仙南フォレストクラブ「宮城県」

SDGsに
立脚した活動へ

宮城県南部の仙南地区で活動す

る仙南フォレストクラブ（以下、当クラブ）。平成21年に管内4つの林業グループを統合し設立しました。

その2年後に発生した東日本大震災では、倒木やがれきの撤去など復旧復興に奔走しました。その経験からこれまでの取り組みを見直すようになり、「人を森林につなげ、自然と暮らしはつながっている」と伝えることに重きを置くようになりました。

林業だけでなく環境や自然保護活動を行う他団体とも連携し、「誰も置き去りにしない持続可能な社会を創る」というSDGsに立脚した活動へと展開。具体的には、高校生へのインターンシップのほか、中学生への自然体験や角田市にある宇宙センターでのワークショップ、短期大学や専門学校で環境教育の講義を行うなどの活動です。

大宮信雄会長のもと、6名の会員は森林組合や林業事業体のほか、住宅メーカーやNPO法人に勤務しています。

プロの現場人でもできない体系的な学び

当クラブが設立当初から行ってきた活動が宮城県柴田農林高等学校（以下、柴田農林高校）森林環境科2年生へのインターンシップです。はじめの頃は年に1回、見学や玉切り体験を1日で実施していましたが、「本気で林業の担い手を輩出する」ために強化し、今では5月から12月まで年間10回の実習を行うようになりました。

その内容を紹介すると、初日はSDGsと森林・林業講習会。次は手鋸で伐採体験。3回目と4回目でチェーンソーの仕組みやメンテナンス、取り扱い方を学び、5



ガイダンスの様子。この日の講師は会で企画を担当する海藤さん



演習林での伐木実習。受け口を見て伐倒方向の確認



チェーンソーの取り扱いと安全講習

回目に学校の演習林整備を兼ねた立木伐採。今年はコロナ感染症対策で、密にならないよう全20名

の生徒を4つの班に分け4名の会員が手分けをして指導。注意喚起で声を出さなくて済むよう全員に笛も配布しました。

授業時間も合わせると多い生徒では10本以上伐倒します。技術実習のほか、丸太がどうなるのか、流通と加工過程も見学します。6回目には地元の株式会社サカモトを見学。自社有林の成長量に見合う住宅数しか造らず、

製材や大工の建築まですべて自社で行っている企業で、その工程を見学し、社長から採材や木取りについて解説してもらい、1本の木を大切に使うことを学びました。

7回目は合板工場。熟練した職人が数名でやっている昔ながらの工場と、AIを駆使した大型工場の両方を見学しました。8回目のCLT工場見学はコロナ禍の影響で残念ながら中止になりました。

実習最後のメニューは、原木市場の見学です。9回目の実習時に、生徒の見守る前で樹齢70年の大径木を会員の小山真光さんが伐倒し、プロの技を見せました。

林業の山の現場から、丸太が加工され、家が建築されるまで、川上から川下までの流れを体験し、プロの現場人でもめったにできないほどの体系立った実習内容です。企画を担当している海藤節生さんによると「それをやるなら、その前にこれ



演習林から出荷したスギ丸太（真ん中の3本）。伐倒時は一番大きく、地響きをたてて倒れたが、市場では小さく見えた

木材市場で 迫真の競りを見学

12月8日。この日は月に1度、南東北木材の原木市が開催される日で、今では珍しくなった競りが行われます。

をやるべきでしょうと、学校の先生と話し合いながら計画を立てているうちに、こうなってきた」そうです。そして「大切なのはシテムじゃなくて、人なんです。生徒を受け入れてくれる人や企業があつてのことだから」と話します。

見学する生徒たちに同行しました。担任の大和知朗先生から「就く仕事によつては、原木市場に行く機会は一生に1回だろうから、心して見せてもらいなさい」とアドバイスを受けて出発。

到着するとすでに競りが始まっており、生徒たちに気づいた鈴木賢二社長が、学校から出品した丸太を先にかけてくれました。6mの直材、演習林でひときわ大きく立っていた姿と、小山さんの見事な伐倒の技。それらを思い起こしながら、生徒たちは金額を予測。1万円から8万円くらいと意見が分かれていましたが、1・5万円で落札されました。興味のあることは吸収が速い。落札金額に材積を掛けたものが丸太価格だと教わり、木口の札に書かれた樹種や産地、落札者など、すぐに情報を解説できるようにになりました。

身体感覚としての学び

競りの迫力に「めちゃくちや面白」と、のめり込むように見える生徒たち。広大な敷地に並べられた銘木の数々を見ながら「すぐえもの見ちゃった」「自分たちの



行儀良く競りを見る生徒たち



大ケヤキの年輪を数えてみる。「400歳。それって戦国時代じゃん？」

が一番小さいじゃん」と言いながら、巨大な丸太と札を見て回りまです。

「山に立ってるときも丸太でも、自分はブナが好きっす」「このヒノキ、オレが家建てるとき使おかな、いい香りだし」「木があるとやっぱ落ち着くわ」と声が聞こえて来て、実習で体験した学びは感覚として身体に染みみついているようです。

買い付けに来たお客さんが、色

目の違いや美しい木が期待できることなど、同じように見える丸太でも値段に大きな差があると解説してくれる場面もありました。

価値を共有し、山に伝えるのが市場の役割

鈴木社長は忙しい合間をぬって解説の時間を取ってくれました。「競りのクライマックスは2人の客が残り、最後の人が欲しいもの

を買い切るのです。だから競り落とされた価格には公平性があり、そうやってお客さんと共有した木の価値を、山に伝えるのが我々市場の役割なのです」と、流通機能の本質に触れる話をしてくれました。

「高く売れるのはどんな木ですか？」と生徒からの質問に、鈴木社長は良い質問だと褒めながら「値段は需要と供給のバランスで決まるけれど、タイミングもあつ



競り落とされた丸太を丹念に見る

先生は感じています。スマホ片手に普通の高校生たちですが、これほどまで深く林業を学んでいる生徒は他にいないだろうかと思われました。今はまだ語る言葉をもたない彼らですが、これから先の長い人生で咀嚼（そじやく）することでしょう。

帰校時刻にもかかわらず、グラブで巨大な丸太を積み込む様子に見入る生徒を、先生方は焦りながら見守っていました。

目的は、自分自身の考えを持つこと

当クラブが実施しているハイレベルな実習。「林業について、何が良い悪いでなく、ちゃんと知って、その上でどうしてゆくのか、自分自身の考えを持つこと」が目的だと海藤さんは話します。

実習、ことに関係者との調整や事

*まとめ 編集部

「支援とは寄り添うことではなく、同じ方向を向くこと」だと学び、実践しているうちに今の形になり、「無理しているわけじゃないから続けられる」そうです。

令和5年には新しい学校に生まれ変わる柴田農林高校。インタビューシップがそのまま継続できるところを、全員が願っています。



鈴木社長の話を熱心に聞く生徒たち

前準備など、大変な労力が必要ですが、「やるか、やらないか、だねんだ」と。震災ボランティアを通じて「支援とは寄り添うことではなく、同じ方向を向くこと」だと学び、実践しているうちに今の形になり、「無理しているわけじゃないから続けられる」そうです。

て、寺社仏閣の改修など特殊建築があると、普段売れないものが高値になることもある」と回答。今までで一番の高額は、直径1mのサクラが300万円だったことや、一番の重さは12tのケヤキだったことなど、鈴木社長が回答するたびに、「おお〜」と驚きの表情になる生徒たちでした。

いう鈴木社長。生徒の前で話しながらも、来場してくる人を常に把握し、解説を終えると同時にお客のもとに駆け出して行きました。技術や知識だけでなく、生徒たちは仕事に真剣勝負する姿を目の当たりにしました。

10回の実習で多くの職業人に出会います。その人たちを前にすると生徒たちは「行儀良く、少し背伸びし、それも深い学びにつながっている」と大和

事

高校生等の林業就業促進支援

例

マンツーマン指導で伝える 安全と技術



受け口を見て、伐倒方向を確かめる。「なかなか上手くできて
るじゃないか」と褒められていた

千葉県林業研究グループ連絡協議会

〔千葉県〕

55年の歴史を引き継ぎ
新たにスタート

千葉県林業研究グループ連絡協

議会（以下、当協議会）は、令和
元年に県内唯一の林研だった千
葉県林業研究会から移行しまし
た。市町村の支部が解散し個人会

員になった人や、森林や里山に関
係あるグループが参加できるよう
規約を変更し、組織に活気と柔軟
性をもたせるのが目的です。活動
は、会員の所有林を共同で整備し
たり、地域の森林所有者からの整
備の請負いなどが中心で、高校生
へのインターンシップも12年間継
続し、55年に及ぶ歴史はそのまま
継承しています。現在58名の会員
は、農業従事者を中心に、林業事
業体や森林組合に勤務する人で構
成されています。
サンブスギの非赤枯性溝腐病
(以下、溝腐病)が深刻化してい
た千葉県ですが、そこに昨年大型
台風の直撃を2度も受けました。
強風が通過した林地では、溝腐病
のスギの大半が中折れし、1年以
上たった現在でも被害の全容が把
握しきれないほど甚大な被害に見
舞われました。会員の多くも所有
林に被害を受けながらも、要請を

受ければ集合し森林整備に従事す
るなど、地域で重要な役割を果た
しています。
安全のためには
マンツーマンで
千葉県立君津青葉高等学校には、
県内で唯一林業関係を学べる学科
があります。
高齢化による会員減少に危機感
をもち、後継者育成が必要だと考
え、当協議会から学校に体験学習
を持ちかけたのが12年前でした。
学校のほうでも、授業でチェーン
ソーを使った伐木体験をするには
人手が足りないと考えていたとこ
ろで、双方の目的が一致し、イン
ターンシップが実現しました。
当時の推進役だった岩井誠会長
は「初心者の生徒にチェーンソー
を持たせるのだから、安全を考え
たらマンツーマンでなくては」と
学校のある君津支部だけでなく、
他の支部にも呼びかけ参加を募り
ました。それからは毎年生徒の人
数を上回る会員が集まり、伐木造
材技術を伝え続けてきました。「生
徒に教えることは、自分たちの技



あいさつする生徒。コロナウイルスの蔓延が心配される中、全員マスクを装着し感染対策をしっかりとった上で開催



生徒2名と会員2名のペア。まずは木の重心を見るところから

実は、授業で森林管理や技術を学ぶほか、生徒らは夏休みに5日間の林業就業支援講習会に参加し、チェーンソーと刈払機の特別教育講習を受講しています。しかし、昨年他県で起こった事故の影響で、今年の伐倒実習は中止に。この日が初めての伐倒で、直径24cmのズギを見て「太すぎる……」と、たじろぐのも仕方ありません。

指導する会員は口頭で細かく指示することは避け、受け口をチェーンソーで示すと、すぐにチェーンソーを手渡し、やってみよう促し

コロナ禍の中 こぎつけた開催

術向上にも役立つ」と考え、継続しています。

11月25日。今年度は2年生12名と当協議会から16名の指導者が参加し、君津支部会員の三平文秋さんが所有する樹齢50年のスギ林で実施されました。

新型コロナウイルスの広がりが心配される中での開催。生徒は全員マスクを着け対策を念を入れています。あいさつにたった岩井誠会

長は「息が苦しくなったら少し離れてマスクをずらし、絶対に無理をしないでください」と気遣います。

プログラムは、伐倒した木を造材するまでを午前中に行い、午後には集材を中心に、丸太を、トビを使って積んだり、バックホーで動かす体験で、2チームに分けて午前と午後を入れ替えるという設定です。

あいさつのあと、生徒2名と会員2名ずつがペアになって林内に移動。選木や足元の整備など、会

員らは事前準備を
していました。

到着するやいなや、チェーンソーのエンジンがかかり作業開始。指導者の素早い動きに遅れまいとおしゃべりを止め一瞬で集中する生徒を見て、担任の先生は「学校では絶対に見せない姿だ」と感心していました。



チェーンソーを水平に入れる方法を教わる。マンツーマンだから生徒にも安心感があった

ました。

怖い気持ちがあると腰が引け、手元も足元もかえって不安定になります。1人の生徒に対して2人がかりで指導。エンジン音で会話は聞こえませんが、受け口をつくり終わるころには生徒の姿勢は安定し、追い口を水平に落ち着いて入っていました。ツルを多めに残し最後はクサジを使います。手元ばかり見がちな生徒に、木が動き始めていることを知らせ、それがこの日唯一の大声での注意でした。

倒した木の枝払いを手伝ってもらいながら玉切ります。チェーンソーのバーが挟まれないよう下部に切り込みを入れてから始めるの

ですが、上部の切り口と合わず何度もやり直し。苦勞しながら末口まで2mずつの造材が完了したとき、生徒の態度は自信を得て堂々として見えました。

先輩だからこそ 後輩の気持ちがわかる

伐倒実習する班を回ってフォロワーしていたのは、君津青葉高校の卒業生で千葉県森林組合に就職して4年目の小林哲也さん。「コワイ」とつぶやく生徒に「ブツブツ言わずやってみ」と励ますお兄ちゃん的存在です。小林さん自身が授業やインターンシップを通じて林業を職業にしようと考えるよう



追い口を入れる。怖い気持ちはあるが果敢に立ち向かう



玉切り。バーが挟まれないようチェーンソーの入れ方を教える小林さん。年齢が近く、生徒からお兄ちゃんのように慕われていた



バックホー体験。手元のレバーを見ることなく操縦。驚くほど速い上達だった

になりました。「高校生のわからないこと、できないことがわかる。自分もそうだったから」という気持ちで後輩に向き合います。生徒たちは「やはりプロはすごい」「小林さんが優しく教えてくれたのでできた」と感想の声を寄せていました。

本日一番人気はやはりバックホー。「難しかった」という感想も

ありましたが、一度教わると感覚で覚えてしまうなど、才能を発揮する生徒もいました。

雨によるとっさの判断で プログラム変更

天気予報では、昨夜の雨は上がって晴れるはずでしたが、お昼近くに雨足が強まってきました。生徒の健康や安全を考慮し、午後のプログラムを安全講習とシイタケ栽培を学ぶことに変更。とっさの判断でした。

全員が入れる三平さんの広いシイタケハウス。岩井会長は自ら作成した「伐採作業手順」を配布し、ヒューマンエラー防止のため指差し呼称することなどを解説。午前



岩井会長の安全講習



原木を見ながら三平さんにシイタケ栽培を習う

「生徒の作業服は薄いので今日の天気では寒かっただろう」「雨で足場が滑るから安全のためにも変更して良かった」「今年の生徒はおっかなびっくりだったから、初めに伐倒の実演をして見せたほうが理解しやすいんじゃないかな」などという意見が出ました。

中に実習したので、意味がよく理解できた生徒らは、うなずきながら静かに聞いていました。
三平さんによるシイタケ栽培講習では、整然と並べられた3000本の原木と、収穫直前のシイタケを見ながら、コナラやクヌギの伐り出しから植菌、そして重い原木をこまめに動かし湿度や温度を管理する話を聞きました。
「シイタケ栽培の大変さを知った」という生徒。最後

に「サラリーマンになって勤めるのと、自営で農林業をやるのではどう違いますか」と質問が出ました。三平さんは「1人でやるのは大変だが、自分のペースで自由にできる」と回答。実践している人の姿を目の前で見て、将来の進路への参考になったようです。
**来年につながるために
反省会は必ず行う**

当協議会ではインターンシップ

終了後、近くの公民館に集まって反省会を毎年必ず行っています。



毎年必ずインターンシップ終了後に開催される反省会。活発な意見が出て来年につなげている

安全への取り組みについて、数日前「地域型森林管理担い手育成支援モデル事業」の安全講習に参加した岩井会長は、「習った内容を生徒に伝えられたと思う。我々自身もさらに安全意識を高めていこう」と締めくくりました。

後継者育成は地道な取り組みですが、毎年わずかながら林業関係に就職する生徒がいます。「大変だけど、面白さがわかった」「どんな仕事か知ることができた」という生徒たちの声はげみに、今後も継続してゆくつもりです。

*まとめ 編集部

事

高校生等の林業就業促進支援

例

県内唯一の農林高校生に向けた 特用林産と林業機械の就業体験講習



真剣な様子でチェーンソーの目立てに挑戦する生徒

山梨県林業研究グループ連絡協議会

〔山梨県〕

山梨県林研の概要

山梨県林業研究グループ連絡協

議会（以下、県林研）は、地元の

林業従事者で作る団体や地域で幅

広い活動をしているNPO法人な

どで構成されています。令和2年10月時点の会員数は148名で12団体あります。

各構成団体は、森林整備ボランティアや参加型林業体験教室、在来動植物の保護活動など、林業の普及や森林環境教育の活動に励んでいます。

2本立ての就業体験講習会を毎年開催

各構成団体が様々な林研活動を展開するなか、県林研では、将来の林業を担う高校生を対象に林業就業体験講習会（以下、講習会）を開催しています。対象としている高校は、山梨県内唯一の農林業専門高校である山梨県立農林高等学校（以下、農林高校）です。農林高校には、森林の総合利用を学ぶ森林科学科があり、林業関係への就職実績や、森林・林業関連学科への進学実績もあります。

講習会は、農林高校からの要望を受け、「測量・林業機械講習会」として行う測量実習とチェーンソーの分解や目立てなどの整備、「高性能林業機械等講習会」として行うハーベスタやフォワーダ、グラップルなどの現場での操作体験という2つの内容に分けて行ってきました。

地元の特用林産物も学びの対象に

令和2年度は新型コロナウイルス感染症の影響を受け、3月から5月にかけて学校が休校となりました。授業時間の確保のため1日のすべてを実習に充てることができなくなり、また3密を避けるためバス移動もできないことから、高性能林業機械等の講習会を実施しないことになりました。

そこで、農林高校の先生方と相談し、高校の要望を取り入れて、



栽培実習。菌床に湿らせた鹿沼土を覆土する



収穫した山梨夏つ子きのこ[®]

山梨夏つ子きのこ[®]の栽培実習と調理実習

6月から10月にかけて3年生28名を対象に栽培実習を、また、10月2日には調理実習を行いました。

◆栽培実習

講師は、山梨県森林総合研究所で山梨夏つ子きのこ[®]を開発した研究者にお願いました。山梨県内の種菌メーカーが生産した菌床に、乾燥を防ぐために湿らせた鹿沼土を覆土し、湿度を保ちながら栽培しました。収穫したきのこは生徒による食味調査を行い、食感、味、見た目等について意見をまとめ、どのような調理が適しているのかなどを考えるきっかけとなりました。

◆調理実習

甲府市などで活躍

する野菜ソムリエの大久保掬恵さんに講師をお願いし、「山梨夏つ子きのこのバター醤油焼き」と「山梨夏つ子きのこトマトチーズ焼き」を作り、試食しました。大久保先生の数あるレシピの中から、生徒たちの多数決で選ばれたメニューでしたが、手軽に夏つ子きのこの菌ごたえとうま味を楽しむことができました。

普段あまり料理をしない生徒たちが大多数でしたが、キノコ類の基本的な調理方法、目がしみにないネギの切り方、包丁の持ち方など大久保先生から料理の基礎を教えてくださいることができ、貴重な経験だったと思います。



山梨夏つ子きのこのバター醤油焼き（左）と山梨夏つ子きのこトマトチーズ焼きの出来上がり！

次の内容で今年度の講習を実施することになりました。

- ①「山梨夏つ子きのこ[®]」の栽培実習と調理実習
- ②林業機械講習会／チェーンソーの整備
- ③刈払機の安全衛生教育

①の「山梨夏つ子きのこ[®]」は、山梨らしい新たな特用林産物として、山梨県森林総合研究所が開発した「クローアワビタケ」の新品種で、現在、産地化・販路拡大に向けた取り組みを行っているきのこ

です。そのため、令和2年度は多様な担い手育成事業を活用し、授業の一環として栽培とPR活動を行うことになりました。

②のチェーンソーの整備は例年行っている講習です。授業のなかでは、チェーンソーを分解し整備することまではできないとのことですが、昨年度に引き続き実施することになりました。

③の刈払機の講習は、在学中に所定の講習を修了していると生徒たちの就職に有利になるとのことです。実施することになりました。



キノコ類だけでなく、料理の基礎も教えてもらった

林業機械講習会 チェーンソーの整備

チェーンソーの基本構造、整備に関する知識と技術を身につけ、林業に対する知識と理解を深めてもらうことを目的に実施しています。今年度は11月10日に2年生30名を対象に行いました。

◆チェーンソーの基本構造とメンテナンス

講師は、主に富士北麓地域で森林整備ボランティアや参加型林業体験教室などで活動している、北富士林業研究会の方々です。「高校生が、林業に興味を持つきっかけ作りに協力したい」と、皆さん快く講師を引き受けてくださいました。

講習では、まずチェーンソーの基本構造、メンテナンスの仕方に関する動画を見てもらいました。動画を見終わった後は、それぞれグループに分かれ、メンテナンスの講習を受けました。分解・組み立ての方法や、使用後に木くずが詰まりやすい場所、目立ての仕方を講師の皆さんがユーモアを交え

ながら説明しました。

生徒たちは、目立ての難しさに悪戦苦闘していましたが、講師の方々は、メンテナンスをしつかりすることで、現場の作業がスムーズに進むことを話し、道具を大切に扱うことを教えていました。

◆丸太切りの実習

目立ての作業が一段落ついたところで、実際に丸太を切る実習に移りました。生徒は自分たちが目立てをしたチェーンソーの切れ味に一喜一憂していました。チェーンソーを扱う作業は、一歩間違えば重大な事故につながります。講師の方々は木の近くに石がある

とどうなるか。また、落ち着いて作業することの重要性などを生徒たちに伝えていました。

一方、それまで壊れていたと思っていたチェーンソーを、講師の方が整備して直してしまったのは、先生方も驚き、元気にうなるチェーンソーのエンジン音を聞きながら、点検整備の大切さを実感していたようでした。

刈払機の安全衛生教育

刈払機の基本構造、整備に関する知識と技術を身につけ、操作に慣れることを目的に、1月19日、2年生など10名を対象に行いました。なお、本講習は、労働安全衛



目立て後、丸太切りに挑戦。さて切れ味は？

また、生徒たちが栽培した夏つ子きのこは乾燥きのこに加工し、秋に行われる収穫感謝祭で販売する予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止のため中止となってしまったことから、希望する保護者に販売したところ、見事完売することができました。

今回の栽培と調理の実習を踏まえて、今後、生徒たちがどのようなPR活動を行うのが楽しみですか。



刈払機の構造を学ぶ生徒

造のものもありました。適切に整備していれば20年以上も使えることに、生徒たちはとても感心していました。屋内での実習後、現場に出て斜面での刈り払いを体験。平地と違い、斜面はバランスを取るのが難しいことをよく理解できたようでした。

また、現在研究所で試験を行っている、リモコン操作による刈払機の実演も見学しました。機の実演も見学しました。思っていたよりも動きが機敏で、斜面をぐんぐん進んでいく姿は昆虫のようでした。生徒たちが現場で仕事をする頃には、このような機械を使いこなす技術も必要になるのだと、改めて実感しました。

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、例年行っていた内容で大幅に変更しての対応となりました。昨年度まで実施してきた高性能林業機械の講習ができず、生徒たちには申し訳ない気持ちもありましたが、改めて高校側の要望を聞き、内容を変更し実施できたことは、講師を引き受けてくださった方々のご協力があったこそだと、強く感じました。

また、講師の方々の生徒に接する姿勢を見ると、「1人でも多くの高校生に林業界への就業を希望してもらいたい」という強い思いを感じることに、仕事への真摯な態度が生徒たちには何よりの刺激になったのではないかと思います。

この講習会は、「林業のプロから直接指導を受けられる『授業』として、農林高校から毎年の開催を期待されています。県としても県林研が行う若い人材の育成に向けた活動を、これからもサポートしていくつもりです。

*まとめ

山梨県林業振興課 普及指導担当

生教育の修了を目的としていますので、実際に刈払機を使う事業所への就職を希望している生徒を対象にしています。

◆座学と体験実習

講師は、山梨県森林総合研究所の林業普及指導員の方々にお越し、座学と実習を行いました。

座学は関係法令や、刈払機とその作業に関する知識、危険動植物や振動障害に関する知識について、パワーポイントやDVD、実演に

よる講義を受けました。林業の現場で行う刈り払い作業は、夏の暑い時期によく行われます。そのため、熱中症やハチ刺されによる被害が多いことから、安全に作業をするためのポイントをわかりやすく解説してもらいました。

実習は実際に刈払機を分解し、点検・掃除・刈刃の目立てを行いました。毎日行う点検、毎週行う点検、毎月行う点検と段階があり、それぞれの整備を実践しました。整備した刈払機の中には今も現役で活躍する平成9年製の

地元のプロから学ぶ大切さをこれからも

今年度は新型コロナウイルス感染症の影響により、例年行っていた内容を



リモコンで操作する刈払機の実演を見学

事

高校生等の林業就業促進支援

例

三重の森林を育む人づくり 高校生の 森林調査・林業機械・労働安全体験



オンラインでハーベスタシミュレータの操作方法を熱心に聞く生徒たち

三重県林業研究グループ連絡協議会

〔三重県〕

今年度は1、2年生を
対象に林業体験

三重県林業研究グループ連絡協
議会（以下、当協議会）は、県内
8つの林業研究グループから構成

される団体です。令和2年8月現
在、北は亀山市から南は紀宝町ま
でに存在し、会員163名が在籍
しています。

当協議会では、林業への就業を
将来の選択肢の1つとして考える
きっかけとしてもらうため、県内
で唯一、森林・林業を専門的に学
べる学科を開設している三重県立
久居農林高等学校の生徒を対象と
した林業体験を平成28年度から実
施しており、令和2年度で5年目
の取り組みとなりました。この間
同校の生徒が新卒で継続的に林業
に就くなど、一定の成果を上げて
いるところです。

林業体験は、例年2年生のみ
を対象として実施していましたが、
今年度は新たに1年生も対象
に加えて2学年で開催することが
できました。開催に当たって様々
なハードルもありましたが、県
林業普及指導員の全面的な支援の

もと、高校、津市、中勢森林組合
地元の林研グループである白山町
林業研究会、日立建機日本㈱など
関係者の協力を得ながら、無事に
事故なく開催することができまし
た。以降、開催時順にその内容を
紹介します。

2年生の林業体験 〜2年生の夏は自分の 将来を考え始める時期〜

令和2年8月6日（木）〜7日
（金）の2日間、津市有林である
「美里水源の森」（津市美里町）を
お借りし、2年生28名を対象とし
た林業体験を実施しました。

例年、夏休み期間を利用して実
施しているもので、実際に現場で
チェーンソーによる伐木を体験す
るなど、普段の授業では体験でき
ない貴重な機会となっています。

また、これまではチェーンソー
伐木のほかに高性能林業機械の操

作体験も実施していましたが、近年の林業現場では、施業技術だけでなくプランニング技術も重要であることから、今年度は林業機械に替えて、初めて試みる森林調査を体験してもらいました。

例年、高校2年生で行う当体験をきっかけに、「林業」に関わる仕事を自分の将来の選択肢に入れる生徒が現れ、林業就業につながっています。生徒が考えるきっかけを提供しているという点において、この林業体験を開催する意義は大きいものがあります。

目指せ！ 施業プランナー 最新機器で調査体験も

森林施業の提案には、森林の現状を知るための森林調査の技術が欠かせません。1日目は、レーザ計測技術を使った森林調査を体験しました。

三重県林業研究所の研究員の指導のもと、幅広く活用されているレーザ測高器 (TruePulse ヘトウルパルス) や 輪尺を用いた従来型の森林調査に加えて、地上レーザスキャナ (森林3次元計測システム O W L (アウル)) を用いた

最新の森林調査を体験しました。生徒たちには、従来型の森林調査によって各自計測したデータを元に、形状比や樹冠長率を計算してもらい、単木の評価に挑戦してもらいました。これと並行して、地上レーザスキャナで取得した計

測データの解析をパソコン上でデモンストレーションし、生徒が各自計測した単木データとの比較によってレーザ計測技術の精度を体感してもらいました。続いて、レーザ計測データの解析によって求められた形状比 (平均)、樹冠長率



レーザ測高器を使って、樹高計測に挑戦

(平均)、相対幹距比により林分の評価を行って必要な間伐本数を導き出し、その結果を踏まえて翌日に伐採する間伐木の選木を行いました。

初めての チェーンソー伐木・造材

2日目は、チェーンソーによる伐木・造材を体験しました。ほとんどの生徒が、チェーンソーで立木を伐採するのは初めてです。

中勢森林組合職員から、チェーンソーの取り扱い方法や注意点、伐倒方法、安全装備についての説明を受け、森林組合職員による伐木・造材のデモンストレーションを見学した後、3班に分かれて伐木・造材作業を体験しました。

生徒たちは、慣れないチェーンソーの操作に戸惑いながらも森林組合職員の丁寧な指導のもと、真剣に取り組んでいました。「かか



地上レーザスキャナの計測について説明を聞く生徒たち



地上レーザスキャナの解析デモンストレーション



地上レーザスキャナによる解析結果

り木」も発生しましたが、フェリ
ングレバーやけん引具を用いた安
全な処理方法を体験する良い機会
にもなりました。



チェーンソーで受け口作りを体験



受け口について講師の説明を受ける

1年生の林業体験
「職業としての「林業」を
知ってもらおう」

令和3年1月13日（水）、久居

農林高校内実習施設において1年
生27名を対象とした林業体験を実
施しました。

1年生は、幅広く森林や自然に
ついて学んでいる段階であり、そ
もそも職業としての「林業」を知
らない生徒が大半です（現にアン
ケートでは、27名中16名が入学前
に「林業」について「ほとんど知
らなかつた」と回答）。

そこで、生徒たちに林業の現実
の厳しさとともに、その楽しさも
知ってもらおうことを念頭に、「林
業労働に関する講義」で林業の実
態を学んだ後、「VR（バーチャ
ルリアリティ）技術を用いた林
業安全教育教材」「ハーベスタシ
ミュレータ」「チェーンソー実機
操作」体験を実施しました。



林業労働に関する講義

林業労働災害を 仮想体験

まず、生徒には「林
業安全教育360度VR
」を体験してもらい
ました。この教材は、

農林中央金庫と全国森

林組合連合会が導入しているもの
で、「他人伐倒」による事故を実
写VRで再現し、あたかも災害現
場にいるような疑似体験をするこ
とで、林業現場における「危険体
感教育」を受けられる教育ツール
です。ゴーグルをのぞくと自分が
人工林内に立っている状況となり、
自分の頭の動きに合わせて景色が
動く仕組みとなっています。CG
ではなく実写を使っている点がよ
り一層の現実感を生んでいます。

生徒たちは、林業現場で発生し
ている事故の実態を仮想体験する
とともに、労働安全衛生規則にお
いて新たに規定された「立ち入り
禁止区域」（立木の高さの2倍に
相当する距離を半径とする円内に
他者を立ち入らせない）について
学びました。



林業安全教育360度VR体験。
生徒には林内で下から見上げた
樹冠の景色が見えている

高性能林業機械が安全で 快適な労働環境を実現

次に、ハーベスタシミュレータ
操作体験です。このシミュレータ
は、実機で使用されているのと同
じ操作レバーをパソコンに接続し、
そのレバーを操ることでパソコン
画面上のハーベスタを操作するも
ので、日立建機日本(株)から機材を
レンタルし、操作指導もお願いし
ました。

操作レバーには左右それぞれに
18個のボタンとトリガーが装着さ
れており、レバーの前後左右の動
きとボタン・トリガーの操作を組
み合わせて立木を伐採し、造材・
枝払いします。画面は、ハーベス
タのキャビンに座ったオペレータ
の視点となっており、目の前に立
っている立木6本をハーベスタで



ハーベスタシミュレータで操作を体験する生徒

掴んで伐採し、造材・枝払いをして所定の場所に積むという一連の操作を体験。一見、操作は非常に複雑に思えますが、若い世代とあってのみ込みが早く、なかには6本の立木を4分ほどで処理した生徒もいて、これには、講師も感心していました。

やはり実機体験は 欠かせない

最後は、チェーンソーの実機を使った丸太の輪切り体験です。

初めに、講師である中勢森林組合職員からチェーンソーの始動方法、安全な取り扱い方法について



丸太切りに挑戦！



チェーンソー操作について説明を聞く

説明を受けた後、安全装備を装着したうえで1人ずつチェーンソーを操作して丸太を輪切りしました。直前のバーチャル体験で林業における労働災害について学習した

こともあり、生徒たちは指導者の説明を真摯に聞き、チェーンソーの操作も落ちついて真面目に取り組んでいました。チェーンソーで丸太を切る体験は新鮮だったようで、「気持ちいい」「最高」といった感想も聞かれました。

猛暑、コロナ禍… 開催までの ハードルを乗り越えて

2年生の林業体験は8月初旬と真夏であり、「災害級」と言われる暑さの中、熱中症予防に細心の注意を払う必要があったほか、新型コロナウイルス感染症予防対策として3密を避けるため、津市や白山町林業研究会の協力によって生徒の移動に使うマイクロバスを通常の倍となる2台手配していたなど、対応に努めました。

また、1年生は直前に発令された緊急事態宣言下での開催となったため、ハーベスタシミュレータ操作体

験で講師を務めていただいた日立建機日本(株)には、当初予定していた本社(埼玉県)からの指導者の来校を急遽中止してオンラインに切り替え、現場での指導は三重営業所の職員に対応していただきました。

このように様々なハードルを乗り越えて開催できたのも、生徒たちに林業体験をさせたいという関係者の思いがあったからこそだと思います。

生徒のアンケートでは、「チェーンソーをもう1度学びたい」「もっと木を伐りたい」「勉強になった」といった回答がありました。これからも、生徒の声に応えられるように関係者と協力しながら活動を続けていくつもりです。

最後になりましたが、開催に当たって協力いただいたすべての関係者の皆様にご場をお借りしてお礼申し上げますとともに、一刻も早くコロナ禍が収束することを祈念いたします。

＊まとめ

三重県林業研究グループ
連絡協議会

事

高校生等の林業就業促進支援

例

森林の大切さを伝えて 林業・木材産業分野への就業を促進



山口農業高校2年生によるドローン（無人航空機）体験

山口県林業研究グループ連絡協議会

〔山口県〕

山口県林業研究グループ連絡協議会（以下、協議会）は、高校生に森林の役割や林業の重要性に対

する理解を深めてもらうとともに、林業・木材産業分野への就業を促進するため、インターンシップに

取り組んでいます。県内2高校の今年度の活動を紹介します。

山口農業高校1～3年の取り組み

◆1年生／林業就業に向けた講義
山口県立山口農業高等学校（以下、山口農業高校）環境科学科の生徒は、秋頃にコース分けを控えており、自身の進路を考えようという「森林資源」と「農業土木」のいずれかのコースを選択します。

このため、今回は生徒たちのコース選択の参考になればと、6月29日（月）、33名を対象に林業への就業について講義を行いました。森林組合や林業事業者の仕事内容だけでなく、山口県の森林資源の現状などを踏まえながら、様々な視点から説明しました。本県の森林の多くが伐採期に達し、森林・林業が大きな転換期を迎えていること、林業活性化には若者の力を

必要としていることなどを呼びかけました。

また、山口農業高校の卒業生で、山口県中央森林組合（以下、森林組合）の作業班員として働く梶原優唯さんに、就業することになったきっかけや就業してからの苦労、仕事へのやりがいや楽しさ、1日の流れや林業の作業内容について、当日の朝までかかったという手作りの資料を使いながら、話してもらいました。

梶原さんが普段使用していると



林業への就業について講義を受ける山口農業高校の1年生

講義後の質疑では、生徒たちから「体力が必要か」「給料は」等、多くの質問があり、アンケートの中には、「梶原さんの話を聞いて、すごくやりがいのある仕事だと思った。林業の方向に進んでもいいな」「道に迷ったときは、今回の研修のことを思い出して林業も考えてみたい」という



先輩に説明する卒業生の梶原優唯さん



プロセッサによる枝払いと造材操作体験



伐倒作業体験

職員が伐倒方法について説明し、生徒に質問を投げかけると、生徒は受け口の角度や追い口の高さなどについて、きちんと回答していました。当日は時間の都合もあり、受け口は組合職員がつくり、生徒は追い口からの作業でしたが、緊張のあまり足が震える生徒も。「掛かり木」になった原因は何か、「つる」の残し方の基本動作を確実に行

いうチェーンソーや刈払機を持ち込んでもらい、和気あいあいとした講義になりました。

意見もありました。講義中、生徒は熱心に耳を傾け、梶原さんの言葉に林業への就業に関心を持ってもらえたようです。

◆2年生/ドローン、林業機械・伐倒体験

10月6日(火)、森林資源コースの2年生15名を対象に、ドローン(無人航空機)の活用、素材生産現場における高性能林業機械の実演と操作体験、および50年生の伐倒体験を実施しました。

まず、学校から現地に至るバスの移動中に、生徒たちに森林組合の業務内容や高性能林業機械の特徴や仕組み、また、現在の木材価格などについて説明しました。現地近くの広場で、森林・林業の現場におけるドローンの活用として、森林の現況確認や気象災害の把握、今後の利活用について説明を受けた生徒たちは、デモ飛行や自動飛行によるドローン計測を見学しました。ドローンによる映像や解像度の高さに、生徒たちは驚嘆の声。さすがに今の若者たちには大変興味のある内容だったようです。

続いて、山口市阿東の山口市有林、森林組合の素材生産現場へ。生徒たちは組合作業員による高性能林業機械の実演を見学し、森林の状況について説明を受けました。次に各班5名の3班に分かれ、グリップによるフォワードダへの原木の積み込み、プロセッサによる枝払いと造材、50年生のスギの伐倒に挑戦です。

林業機械では、組合職員の丁寧な指導のもと、慎重に、繰り返し作業を行い、機械の構造等について説明を受けました。

生徒たちは「伐木等の業務に係る特別教育」を受けており、卒業時に資格を受け取れます。

スギの伐倒体験では、組合職員が伐倒方法について説明し、生徒に質問を投げかけると、生徒は受け口の角度や追い口の高さなどについて、きちんと回答していました。

うなど、学びながら、貴重な体験になったと思います。

◆3年生／見学と林業機械体験

6月26日（金）、森林資源コース3年生14名を対象に、認定林業事業体の素材生産現場、山口県森林組合連合会山口共販所（以下、山口共販所）や木材加工場の見学を行いました。

コロナ感染拡大防止のため、2台のバスに分乗しての実施です。はじめに、森林組合の素材生産現場（搬出間伐）で、取組状況や生



フォワーダで原木の積み込み体験



共販所の見学



製材所の見学

産システムの説明、および組合職員によるハーベスタ、フォワーダの実演、その後2班に分かれて操作体験を行いました。1人1人が機械に乗り込み、組合職員からレバーの操作方法を習い、原木の積み込みや造材を経験しました。続いて、山口共販所（木材市場）

では、同連合会の森田所長から組織・業務内容および森林組合系統の業務や木材の流通についての説明を受け、市場に出材されている原木を見学しました。

午後は、大林産業(株)本事業所（製材所）を訪問し、貯木場から製材・乾燥・プレカットなど一連の工程を見学しました。

同事業所の大林社長から、県産木材を主体とした製材・プレカットなどの業務内容や、木質バイオマスボイラーを導入し端材を木材乾燥に活用するなど、環境に配慮した取り組み、集材材など新たな事業への展開について、会社概要とともに説明がありました。

生徒たちは、林業機械操作は特に興味を引くようで、嬉々として取り組んでいました。見学ではメモを取るなど熱心な姿勢が見られました。

林業・木材産業への就業促進に向けて、一定の成果が得られたのではと思います。

◆林業仕事セミナー開催

6月30日（火）には、森林資源コース3年生15名を対象にセミ

ナーを実施しました。森林の役割や林業の必要性の理解を図るとともに、林業の仕事の魅力を伝えることで、認定林業事業体への就業を促進することが目的です。

一般財団法人やまぐち森林担い手財団から、林業の仕事の概要や、就業を円滑にするため、就業前における見学会・就業体験から就業後の技術・資格取得研修までの流れの説明がありました。

その後は、各班5名の3班に分かれ、参加事業体から林業の重要性や仕事に賭ける思いなど幅広い説明を受けました。

生徒からは、「もつとたくさん話を聞いてみたい」「林業の道も



参加事業体の説明

良いかも」などの意見が聞かれ、大変、有意義なものになったように感じました。

萩商工高校2年生の 取り組み

◆2年生/木造建築、林業機械の 学習、原木市場の視察

9月30日（水）、萩地域林業振興会連絡協議会は、山口県立萩商工高等学校建築コース2年生14名を対象にインターンシップを実施しました。

生徒たちは、コロナ感染症拡大防止の観点から、2台のバスに分乗。はじめに、萩・明倫学舎において、「山口県の森林と木材利用」等について、次に、萩市土木

建設部建築課職員から「萩・明倫学舎保存整備状況」について学習しました。

平成27～28年度の改修工事の状況を資料で説明を受けるとともに、施設内の木造建築技術を見学。

次に、阿武萩森林組合が取り組んでいる高性能林業機械

による木材搬出現場や原木市場の現地視察を行いました。

さらに山口県森林組合連合会福栄共販所（原木市場）では、原木の入荷状況や流通・原木市場価格等について、続いて、

阿武萩森林組合へ移動し、平田参事から森林組合の業務内容について説明を受けました。

午後から阿武萩森林組合が取り組んでいる「高性能林業機械を活用した主伐・再造林一貫作業システム」について、現地で

高性能林業機械の特徴、稼働状況等について学習しました。

実施後のアンケートでは、「林



木材市場の視察



「高性能林業機械を活用した主伐・再造林一貫作業システム」について学習

業があるからこそ、木造建築ができる。今回の研修で木材をどのように加工しているかわかって良かった」「木材の価格が数千円程だったことに印象を受けた」「林業にいろいろと魅力を感じたので就業したいと思えた」などの意見がありました。

継続の力

生徒たちは、今回の体験を通して、県産材による木造建築や木材生産の現状について理解が進んだようでした。

協議会では、今後も県と連携し



県産木材でベンチを製作し、公共施設等に設置（昨年）

ながらこの取り組みを継続していく考えです。生徒たちに、林業・木材産業や、木の良さや県産木材利用について理解を深め、将来の担い手として活躍してもらいたい。林業・木材産業分野就業における選択肢の、今後の広がりを期待しています。

また、このインターンシップの一環として、建築コース2年生が県産木材を使用して製作したベンチを、公共施設等に設置しています。

*まとめ

山口県林業研究グループ
連絡協議会

事

女性林業者の活躍の促進

例

基本を学ぶ 女性林研会員の 作業道と林業経営、 道具体験研修



枝打ち体験。はしごに登り、枝を切る大変さを知った

特定非営利活動法人もりふれ倶楽部

〔島根県〕

グループの概要

島根県の林業研究グループは

22団体514名（男性会員397名、女性会員117名）で、森林率79%の森林をフィールドとし、

小中学生を対象とした森林教室や高校生を対象とした林業教室をはじめ、森林整備や森林保全活動、食品加工等、各地域の特色を活かした幅広い活動を実践しています。その中でももりふれ倶楽部（以下、倶楽部）は、会員数165名（男性会員103名、女性会員62名）を誇る、県内林業研究グループの中核的な団体です。

基本を学ぶ 活動の幅を広げる！

倶楽部では、県内各地で活動する女性林研会員を対象に毎年研修を開催しています。今年度は、森林・林業の基本を学ぶ研修を2つ開催しました。1つは「作業道と森林経営について学ぶ研修」、もう1つは、「森林での活動に必要な道具の使い方、森林での作業を体験しながら学ぶ研修」です。

研修では、チェーンソーや刈払



徳島県の橋本光治さん

機など、がつつり山で活動するための機器類の安全講習を毎年行ってきましたが、今年度は作業道と道具を対象にしてみました。

作業道を学ぼう！

立木を伐採し、搬出して出荷できれば収入を得ることができます。出荷する木材を山から搬出する方法はいろいろありますが、道を使ってトラックなどを利用すれば多くの木材を搬出することができます。森林が収入源になる、という見方をすると、道は重要な経営ツールです。ということで、全国で作業道開設の技術指導をしている



ヘアピンカーブについて質問する会員たち



画像を見ながら作業道について学ぶ



木組みの説明を受ける



バックホーで作業道を開設する橋本さん

橋本林業（徳島県）の橋本光治さんを講師にお招きして、作業道について学ぶことにしました。

まずは、画像等を見ながら説明を受けます。次は、開設した作業道をみんなで歩きました。そして、「なぜ道が必要なのか」「どのような道をつくれればいいのか」を、ポイントの箇所を見ていきながら説明を受けました。さらに、橋本さんが実際にバックホーを使って開

設する作業を見学しながら作業道をつくるときのポイントを教わりました。

橋本さんがつくる作業道は、たとえ木材を搬出することを目的としなくても、自分が山を持つていたらほしい！と思えるような作業道でした。

- ・軽トラックで山に入ることができれば、活動に必要な重い荷物や道具でも持つていける。

・道際の本を残してあるので、運転時の恐怖心が少ない。

・山にある資材を使用するので自然にやさしい。

・子供たちも安心して山に入ることが出来る。

橋本さんの作業道は他にもいいことがいっぱいあり、道があれば、直接収入につながらなくても、私たち倶楽部の活動の幅は確実に広がると思いました。

また、道があれば山の価値が上がります。森林所有者さんにとっても大きなメリットが得られると思いました。道の大きさを改めて教えてもらいました。

道具を学ぼう！

今さらと思うかもしれませんが、森林での活動をしている私たちでも意外と道具を知らない、ということがあります。また、道具を知っていても実際に使ったことがないことも少なくありません。そこで、基本中の基本、森林での活動に使用する道具について学び、実際に作業をしながらその道具を使

用する研修を開催しました。

講師は、島根県林業研究グループ連絡協議会の会長である響繁則さんにお願ひしました。響さんは、島根県の奥出雲町で原木シイタケ栽培をしていて、島根県内各地でシイタケなどの植菌体験やチェンソーを使った伐木の技術研修などで指導者として活躍し、「森のひびきさん」と呼ばれて親しまれている方です。

体験① シイタケの植菌を学ぼう！

シイタケの植菌体験の場で駒を打つ作業を子供たちに指導したり、



山で使う道具の説明をする響さん

自身が植菌体験をしたことのある人は多くいますが、実際に原木にドリルを用いて穴をあける、ということをしたことのある人は意外と少ないため、ドリルの選び方や使い方、原木に穴をあけるときの位置や数、作業時に注意するこ



原木にあける穴の位置を説明する響さん

となどを学びました。研修に使用した原木は、事前に響さんが用意してくれたものを用いました。実際に穴あけの作業をしてみる、どのような樹種の原木がいいのか、穴が深すぎるとどうなるのか、などの質問がたくさん出てきました。今まで何となくわかったつもりでいたことが、今回の研修

で新たな疑問となり、その疑問が次々と解消されていきました。自分で穴をあけて植菌した原木は、1人1本お持ち帰りという特典付きでした。もちろん、持ち帰った後の置き場や注意することなども教えていただきました。シイタケが生えてくるのが楽しみです。



実際に原木に穴をあけてみる

体験② 枝打ちを学ぼう！

知識はあっても、やったことがない作業の1つが枝打ちです。枝打ち体験では、枝打ちはしごを組み立てて設置し、安全帯を着用して鋸で枝打ちをします。安全ベルトの付け方、使用方法、枝打ちの必要性、鋸を入れる位置、鋸の使い方、はしごの登り方など、技術面や安全面、使用する道具について説明を受けました。

体験③ 薪割り機で 薪割りを学ぼう！

今回は斧ではなく、薪割り機を使用した薪割り体験です。薪割り機の構造やエンジンのかけ方、注意事項を学び、実際に直径25cm程度の丸太を薪割り機にかけて薪を作る作業を体験しました。斧で薪を割る作業をしたことはあっても、薪割り機を持っていない人も多く、初めて薪割り機を使

体験する木は枝打ちをしていないヒノキの人工林だったので、ヒノキの硬い枯れ枝を鋸で切るときは大変さや、鋸を挟まれない切り方など、実際にはしごに登って枝を切ってみて初めてわかったことがたくさんありました。また、普段安全帯を使用している高所作業をすることがないのでとても貴重な体験になりました。



薪割り機体験。丸太が軽々と割れる！ 感動！

用するという参加者も多くいました。太い丸太が軽々と割れていくのは感動もので、力のない女性でも短時間に、しかも楽にたくさん薪ができました。薪も樹種によって火持ちが異なることなども学ぶことができました。家に薪ストープのある方は、薪をお持ち帰りいただきました。

研修を終えて

研修では、森林・林業の数多い

作業のなかの一部の体験をしました。が、初めての作業のなかで、和気あいあいとても楽しく研修を進めることができました。女性限定の研修は毎回、参加者が集まるのか企画側は不安になりますが、申し込みも多かったので一安心。研修が終わってから楽しかった、いい経験になりましたと言ってくれたので、ほっとしました。

今回の研修で体験したことを自分たちの活動に取り入れるなど、参加者のみなさんの活動の幅が広がり、森林での活動の楽しさを多くの人に伝えることに役立てていただければと思います。

＊まとめ

特定非営利活動法人
もりふれ倶楽部

事

林業グループ活動等への支援

例

チェーンソーで感動を！ 伐木競技会で伝える山仕事の魅力と技



熱い仲間。NPO法人ロガーズメンバーと大会参加選手たち

NPO法人ロガーズ「群馬県」

「感動」は
NPO法人ロガーズの原動力

「生きていて良かったー」と思

える瞬間が人生のなかでは幾度か
あります。大きな病気や事故から
復帰をした時、長年の夢が叶った
時などに、私たちは今ここにある

命を知って、生きていることのが
りがたさを感じるのではないでし
ようか。ただ、人生を揺るがすよ
うな事柄が日頃から起こるわけ
はありません。穏やかな日々の中
にある幸せも、貴重な命を感じさ
せてくれます。

私たちは、令和元年10月にNP
O法人ロガーズを立ち上げました。
会員は15名、平均年齢40歳ほどの
働き盛りが集まりました。

主な活動は、伐木競技会と群馬
県立農林大学校（以下、農林大学
校）の生徒に向けて行うチェー
ンソー技能実習です。活動するにあ
たって最も大切にしていることは
「感動」です。心が感じて体が動
く時、人生はより豊かになると信
じているからです。チェーンソー
を通じて生まれる感動を、山仕事
をする人たちとともに分かち合
たいと思っています。

山仕事の魅力を
伝えるために山を下りて街へ

近頃は山の仕事を職業選択の1
つとする若者が多くなつて嬉しい
限りです。爽やかな風が吹き込ん
で、新しい林業の在り方を生み出
してくれるからです。山の仕事を
受け継いでいくためには、そこに
身を置く1人1人が、身を乗り出
して自在に変わつてゆく姿勢が必
要なのだと思えます。

これまでの山仕事には大きな問
題があるように感じていました。



NPO法人ロガーズのロゴマーク

それは、お客様の顔が見えないこととです。私たちにとってのお客様とは、山主様と伐った木を使っていただく方々です。山の将来を見通してその価値が高まるように手入れをしても、一体誰がその仕事を見て喜んでくれるのだろうか。本来仕事とは、人がいて困り事があり、それを解決するために頼まれるものです。そこには必ず、人と人が顔を合わせて話をし、関わり合う瞬間があるのです。そういうやり取りを通じて人はお互いに成長して、この社会をより良いものにしていくのでしょうか。

そこで私たちは、自ら山を下りて街に出向き、お客様と話をすることで、山の仕事はもつと賑やかに面白くなる！と考えました。そして、そのための方法が伐木チャンピオンシップでした。

世界レベルの技能と感動で 林業界に新しい風

平成26年に第1回日本伐木チャンピオンシップが開催されたのをきっかけに、山で働くチェーンソーマンたちの意識が開かれて、地域の垣根を越えて交流するように

なり、林業の世界に大きな変化を生み出しました。山に新しい風が吹き込んだのです。

伐木チャンピオンシップは、ヨーロッパを中心とした30を超える国が集まって1970年から催されてきた伝統ある技能競技会です。世界大会が2年に1度開催されており、2018年はノルウェーで行われました。各国の代表選手がそれぞれの持つチェーンソー技能でしのぎを削り、まさに「林業のオリンピック」と呼ぶにふさわしい活況を見せます。

私が海外の大会に参加して仰天したのは、選手たちのあまりにも高いチェーンソー技能でした。難しい技を当たり前のように簡単にこなし、動きは滑らかで美しい。見ているとミスがわからない。世界の広さを目の当たりにして、心を撃ち抜かれるほどに感動したのです。求めていたものがそこにありました。

その時に、競技会ならたくさん



2019年9月、スイス大会での様子

の人に観てもらえて、山の仕事の大胆さと繊細さ、そしてその奥深さを伝えられると確信したのです。さらに、それぞれの選手が競技に全力を注ぐ時に生まれる魂のきらめきは、人の心を動かすことを知りました。

「山の仕事を伝えたいので、山にお越しください」と言っても来てもらうのは難しい。じゃあ自分たちで街に行こうと。チェーンソー

自分たちで競技会を開催

第1回日本伐木チャンピオンシップが開催された平成26年からは、日本において公式の大会は2年に1度しかありませんでした。ヨーロッパ諸外国では、大小含めて年に5〜6回の大会を開催していて、選手の層も厚く、次世代の育成も盛んです。なんと、日本でも実践の場が欲しいと思いついて、「ないなら自分たちの手で作ろう！」と北海道、岩手県、群馬県、石川県の日本大会出場者に声を掛けて、平成28年に初めての競技会を開催しました。NPO法人設立以前も含め、これまで計6回の競技会を行ってきました。

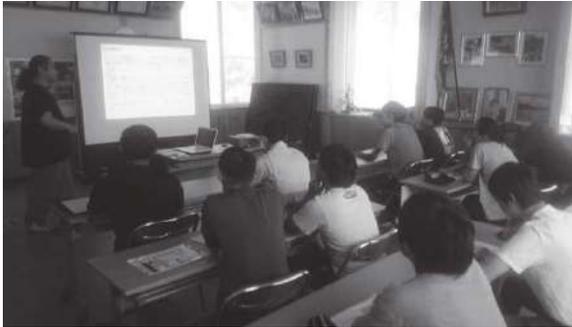
長い道のりだけど やっぱり人に救われる

競技会を行うには会場の確保、資材の調達、人員の手配、そして資金が必要です。

街中でチェーンソーの音を響かせられる広く平らな場所ともなると、なかなか選択肢は多くありませんでしたが、幸運にも藤岡市鬼

石町の元酒蔵の跡地を使わせてもらうことができました。鬼石の地には新しい試みを応援してくれる方たちが多く、快く了承してくれたのです。

資材の調達には頭を悩ませました。原木購入から製材代まで費用がそれなりにかかるので、当初は山持ちの知人に相談して、スギやヒノキ、アカマツを自分たちで伐り出していました。チェーンソーで伐り、グラップルで引き出してトラックに積み込み、製材所まで運びました。実際は、手間代を考えると買ったほうが安いのですが、



みんな真剣！審判講習



思い出のつまった競技会のチラシ

なります。そして、スタッフは真剣に運営に関わることで自分の役割が明確になり、持てる力を最大限に発揮できて得るものが多かったですように思います。

ただ、スタッフは運営のために休みなく身を粉にして働くため、競技会が終わった後の皆のげっそりした顔を見ると、ただただ感謝の気持ちでいっぱいになります。本当にありがとうございました！

言わずもがな、運営にはお金がかかります。チラシを作り、スタッフが個人的につながりのある1人1人と顔を合わせてお話をさせてもらい、応援していただくことで競技会が続いてきました。

地道な歩みでしたが、そのやり取りこそが何よりも大切で、そこで生まれたつながりは大きな成果だと感じています。

きちんとした大会を目指すことで、選手はピリツとした空気の中で競技をすることになり、技能の質を格段に高められる貴重な場に

熱い想いは大会を観に来てくれた方にもちや

んと伝わっていました。「チェーンソーの技がすごかった!!」「真剣な表情がかっこいい!!」と喜んでもらえると、やってきて良かった！と心から思います。

競技会ルールを取り入れた実習 ドキドキは成長の瞬間

農林大学校へ技能実習に行くといつも感動があります。「日本の林業家になりたいです!」とか「最高の苗木を育てたい!」など、彼らの熱い想いを聞くと嬉しくなります。



ソーチェーンの交換競技に挑戦する生徒。ドキドキが止まらない!



群馬県立農林大学校の生徒たちと。「感動をありがとう！」

競技会のルールを取り入れた実習では、まず私がデモンストラーションを行い、希望する生徒が体験します。5種目あるうちのいくつかを行います。5種目あるうちのいくつかを行います。5種目あるうちのいくつかを行います。5種目あるうちのいくつかを行います。5種目あるうちのいくつかを行います。

競技会のルールを取り入れた実習では、まず私がデモンストラーションを行い、希望する生徒が体験します。5種目あるうちのいくつかを行います。5種目あるうちのいくつかを行います。5種目あるうちのいくつかを行います。5種目あるうちのいくつかを行います。5種目あるうちのいくつかを行います。

山から街へ 街から山へ つながりを 実感して生きる

令和2年11月に開催した第6回目の競技会では、これまでの「山から街へ」のコンセプトを刷新して、原点である山に帰りました。植樹イベントと共催して競技会を行い、東京近郊に住む方たちに冬の訪れを感じる山で木を植えてもらいながら、チェーンソーの技を観て楽しんでいただきました。植えた木が育ち、

伐って、お客様のものに届く。そのつながりを見て知ってもらいたいという想いが形になり、嬉しい限りです。今の社会では、私たちの気づかないうちに生活が分断されてしまっているように感じます。食べ物や店で買い、蛇口から出る水を飲む。土はコンクリートで覆われ、草はむしられる。私たちの本来の生活とは、土の上に立ち、草木に触れ、風を感じ、季節の移り変わりの中で日々を営むことにあるのではないのでしょうか。効率化が経済をどこまでも成長させ、私たちの生活を豊かにしてくれる時代はもう過去のもののように感じられます。私たちは「今ここに生きている」ことをしっかりと自分自身の中に取り戻す必要があるのでしょうか。そして山から街の大地のつながり、人と人の心のつながりを感じて生きていくことが大切だと思います。



盛り上がる！枝払い競技。令和2年11月の競技会で

NPO法人ロゴーズはこれからも、山で働く私たち自らが心で感じて動き、つながりを大切にして、この世界がより良くなるように活動していきます。

「チェーンソーで感動を！」

*まとめ

NPO法人ロゴーズ

理事長 今井陽樹

事

林業グループ活動等への支援

例

額田林業の宝・ヒノキ無節材を “高級内装材”として生かす！



柱材生産のことを知っている地元の方ともリタウッドのことで会話が弾む

額田^{ぬかた}林業クラブ「愛知県」

額田の山への矜持

額田林業クラブ（以下、クラブ）は、愛知県岡崎市東部水源域に当

たる額田地区を中心に活動する地域林業に携わる仲間です。昭和51年に創立し、62名の会員の主な構成は岡崎市内の山主・林業従事者

で、年齢は35～85歳（平均72歳）。ご多分にもれず、高齢化が目立ち、どの山主にも跡継ぎがいないという悩みを抱えています。

しかし、山仕事のノウハウは未だ健在で山で培った強靱な足腰があるため、高齢といえど、まだまだ元気で林業への高い意識を持っています。

私たちの山には、明治期より地域全体で積極的に育成林業を進めてきた歴史があります。先年から引き継いできた森林を、枝打ちを繰り返すなど丹精込めて育ててきており、額田の山は戦後の拡大造林で植えただけの山ではないという自負があります。

優良柱材の 限界が見えた

私たちは、これまで地域ブランドとして「無節ヒノキの

優良柱材」の生産を「儲かる仕掛け」の1つとして位置づけてきました。

枝打ちは、幹がビール瓶サイズに肥大したころから始まります。枝打ち高は7～8mとし、3年ごとに1.5mずつ、ほぼ5回に分けて枝を打ち、年輪幅が均一で4寸角の四面無節柱の製品に仕上がることを目指してきました。

軌道の乗ってきた昭和の末期か



約30年続けてきた柱材生産。地元のお祭りでは展示販売する柱材に生産者の顔写真を付けてアピール

ら現在に至るまで、毎年70〜80本程度の無節柱を継続して建築業者に出荷してきました。この間、専門家に柱材の格付けをしてもらったり、地域のお祭りで展示販売を行い、生産者の顔がわかるように顔写真を付けてアピールするなど取り組んできました。

しかし、建物の主役の座が柱から壁に変わったことなど昨今の建築様式の変化で、和室を前提とした柱材の需要が極めて少なくなってきました。そして、ついに平成30年には年度内に製品のすべてをさばききれなくなり、令和元年には、クラブとしての無節優良柱材の集荷と販売は一旦休止せざるを得なくなりました。

意欲ある若者が 林業事業体を設立

このようななか、平成30年3月に熱意ある若者が一般社団法人「奏林舎」（林業事業体）を起業しました。彼は隣町の出身で、平成26年に額田に転居し、クラブ仲間入りした最年少の会員です。額田で起業した背景として宮城県

東日本大震災の体験からバイオマスの大切さを実感していることなどがあります。私たちの仲間入りをしたあとは、「額田木の駅プロジェクト」の事務局を請け負ったり、地域林業の振興や環境教育に力を尽くしたりしています。現在は、これらに加え、地域に密着した森林整備、森林調査、素材生産環境教育、人材育成などの業務も行っています。

また、少人数ですが、形こそ違え彼と同じように額田の地域林業に積極的に関わろうとする若者たちが出てきています。

新たな儲かる仕掛け 高級内装材「リタウッド」

無節柱材の生産を目的に枝打ちを続けてきたヒノキ材の新たな活路について模索しているなか、奏林舎から新たな提案がありました。その提案は、枝打ち材の「無節」という点を生かして「高級内装材」を地元で生産から販売まで手掛け、組織的な仕組み作りをしようというものです。

「死んでも死にきれない」。これは長年、林業に打ち込み、美林を



リタウッドの元となる丸太。クラブ員が手塩にかけて育てた材が並ぶ

育ててきたクラブの先輩の言葉です。これまで「原木市場に出荷↓買わない対価」という、先人たちの汗が正当に評価されていない現状に甘んじてきました。しかし、歴史ある額田の山には、枝打ちをして大切に育ててきた優良枝打ち材の蓄積があります。そこでこれを活かすことで、「我々生産者が加工販売まで関わる↓山側による価格の決定↓正当な対価」という「フェアトレード」の流れを構築したいというのが取り組みの核となる考えです。できた製品は、山主に正当な対価が戻る（return）という意味と、「利他的」に社会

貢献できる商品にとの想いを込めて「リタウッド」と名付けられました。

こうして、平成30年度からその仕組みを実証するため社会実験を開始しました。枝打ち材の素材搬出は会員各自が関わり、製材は小回りが利いて地元の状況がよくわかっていく地元製材所、製品化は額田林業の再生に力を尽くしてくれている地元木材会社、販売および全体の企画・調整は奏林舎が行うというリタウッドの生産から販売までの流れができました。

素材生産から販売まで 「リタウッド」ができるまで

リタウッドの生産から販売までの流れについて、もう少し詳しく説明します。

①会員から出荷者を募り、枝打ち材を伐採して、軽トラックで運べる2m材（末口22cm以上）で地元製材所に出荷します。なお当面は、実証段階のために出荷量は100本程度に調整しています。

②材をナンバーテープにより出荷者別に管理します。採れた製品



出荷者を交えて製材の見学会を実施。クラブ員は材が挽かれていく様子を見守る



無節の板材を取り切ったところで節が現れた。きちんと手入れをしてきた証でもある



クラブ員で出来映えの確認



栈積みされたところ。乾燥を終えた後、地元の木材会社で加工される

その責任感を持つようになりまして。
また、床材、壁材だけでなく、高級家具の材料としての見通しも見えてきました。
クラブとしては令和2年度の出荷から、無節材の育成・選木・搬出・運搬などにかかった費用や節が出たための減額の保証、出材の奨励などのた

④製材、乾燥後、連携する地域の木材会社で床板、腰板の製品に

また、出材地の記録の集積を活

③製材時には出荷者を交えて見学会を実施し、節の出具合を観察することで無節の状況や、1本の材からどんな製品がどれだけの採れるかを確認し、原木価格を逆算する価格決定の仕組みを学びます。また、この機会が、枝打ちの技術や作業の協力など情報を交換する機会となります。

⑤奏林舎から、製品の良さや生産者の願いを含めたリタウツの価値を評価してくださった消費者に、製品を販売します。私たちは、まず地元で認知してもらうことが大事と考えています。地元の産業祭である「ぬかたまつり」で展示し、一般の方に実際に手を触れてもらいつつ、リタウツのPRをしました。

の品質と数で原木価格を決定するために、どの出荷者のどの材から、どんな板が採れたかについてナンバートープで把握します。

仕上げ、商品化します。
床板：低温乾燥、本実加工
1900×15×115〔mm〕
腰板：低温乾燥、本実加工
1900×15×75〔mm〕

過去2年間の社会実験から見えてきたこと

過去2年間の実績は以下の通りです。

2018年度（社会実験1年目）
・出荷材合計：12立米（102本）
・出荷者数：8名12カ所から原木生産
・逆算した原木価格：38,000
〜57,000円/立米

2019年度（社会実験2年目）
・出荷材合計：13立米（112本）
・出荷者数：9名10カ所から原木生産
・逆算した原木価格：41,000
〜64,000円/立米

3年目となる令和2年度もほぼ同規模で実施しています。2年間の取り組みのなかで、製品規格の関係から末口24cmの太さが一番都合良く、細すぎたり太すぎたりすると歩留まりが悪くなることなどがわかってきました。販売まで地域で行うなかで、丸太を生産する側であるクラブ員も一層

めに、出材1本当たり10000円を出荷者に補助することを決めました。

今後は、私たちの身の丈と消費者の反応を見ながら、製品の研究や販売の拡大を考えていきたいと考えています。

リタウッドはこんなところに使われています

これまで生産したリタウッドは、岡崎市内の託児所や喫茶店等で利用されています。託児所を運営する方からは、「自然の恵みや木のぬくもりを感じる空間となり、子供たちも職員も心地良く過ごしています。木を育てた山主さんの『孫を嫁に出すようだ』との言葉から、時代を受け継ぎ、次世代に伝えることの意義を深く理解しました」という感想をいただきました。素材生産から販売まで生産者が責任を持って関わることで、シックハウス症候群による揮発性有機化合物などの心配はありません。さらに純国産材であることで日本の風土になじんでいること、50年以上も大切に育てられたぬくもりの感じられる本物の無垢材でもあり

ます。また、奏林舎が作成したりタウッドのパンフレットにあるように、「山主が森の手入れを行い、豊かで美しい里山の姿を維持していくためには、その労力に見合った正当な対価が支払われる持続可能な取引のサイクルが作られるこ



リタウッドの施工事例：喫茶店（茶流香）



リタウッドの施工事例：託児所

とが重要」になります。これらのことに共感してくださった消費者たちの利用が、次第に拡大していきます。

額田林業を支える仲間と後継者

毎月第1木曜日、私たちクラブをはじめ、額田林業に関わる自伐林家、森林ボランティア、森林組合等林業事業体、行政担当者などが一堂に会し、立場を越えて額田の山の未来を語り合う木の駅プロジェクトの定例会があります。これがサロンとして機能し、額田林業を支える軸となっています。

そして、当クラブをリードする奏林舎は、木の駅プロジェクトの事務局などで地域に根つき、リタウッドなどの新しい仕掛けの模索、山林経営のサポートをすることで、仕掛けを広め仲間をつなぐ役割を果たしています。

近い将来、私たちは先人から引き継いだように、地域林業を次世代に渡すこととなります。自分の息子や孫に跡を継がせるといふ旧来の継承だけではなく、意欲を持って林業を目指す若者に事業を託



額田木の駅プロジェクトの定例会。様々な業種の人材が集まり、額田の山の未来を語り合う

すという流れも大きな選択肢となります。私たち額田林業クラブは、これからの活動の方向として「熱意ある若者が主役となって新しい感覚で活動を牽引し、経験ある会員が肯定的な助言やサポートをしていく」という新しい形を模索しているところです。

*まとめ
額田林業クラブ

事

林業グループ活動等への支援

例

天下一品！佐治漆復活プロジェクトで 山村活性化



漆掻きを進める会員たち

佐治町林業研究会「鳥取県」

佐治町の概要

鳥取県鳥取市佐治町は、鳥取県南東部に位置し、東は鳥取市用瀬

町に、西は岡山県苫田郡鏡野町に接し、東西24km、南北4kmと細長い中山間地域です。

気候は温暖多雨で、平均年間降

雨量は2300mm、冬の気候は零度以下の日も多く、積雪は1mを越す地域もあります。

平成16年10月の近隣9市町村による平成の大合併により、「佐治村」から「鳥取市佐治町」と変更になりました。本年4月現在の人口は1763名で、高齢化率は50%を超えています。年々町内では、耕作放棄地が増え、シカやイノシシの害獣被害も多発しています。

主な産業は、二十世紀梨、リンゴ、シイタケの栽培、因州和紙の製造販売ですが、生産者の高齢化と後継者不足が産業振興の課題となっています。

また、日本有数の大型望遠鏡を有する「鳥取市さじアストロパーク天文台」や紙すき体験のできる「和紙工房かみんぐさじ」があり、県内外より多くの方が足を運び利用しています。

佐治漆三百年の歴史 掻分布および流通

佐治漆の起源は、室町時代（1400年頃）といわれますが、本格的に漆の生産が始まったのは江戸時代初期の元禄時代からで、鳥取藩の保護・管理の元で、生産が増大しました。

江戸時代から大正時代にかけての漆畑は、町中央部を流れる佐治川の南側斜面に集中し、江戸時代天保15年の古図には、田、畑、柿漆畑と表示され、水捌けが良く湿度の多い気候が、漆の木の生育に適していたと考えられます。町の15カ村で漆木の植栽が行われ、幕末には漆木5100本、漆液生産量313貫目（1173kg）が採取され、丹波や大阪などに流通し、鳥取藩の重要な財源となりました。明治時代もその生産は継続し、大正、昭和に引き継がれ、品質が



佐治漆の普及に向けたパンフレット

良く、鳥取県を代表する漆として、全国の有名産地である輪島や福井、大阪などの漆器問屋に流通し、「天下一品」と評価されてきました。

しかし、高度経済成長期になると、輸入品の増加や生活様式の変化、プラスチック、化学塗料の普及、労働力の都市部への移動による後継者不足に陥り、出荷量は昭和16年に563kg、昭和23年に645kg、昭和33年には1568kgとピークになりましたが、昭和40年を境に衰退し、現在は全く生産されていない状態になっています。

佐治漆復興に向けて課題と問題点

佐治町林業研究会（以下、当会）は、漆についての知識は少なかつたため、地域で漆掻きを経験された方に漆の栽培や漆掻きの道具、方法を口頭で教わりましたが、種からの播種と苗木づくりは困難を極めました。

また、過去に漆畑であったところが、杉林や耕作放棄地となり、漆の苗畑の確保も困難な状況にあります。

これに加えて生産流通の活動拠点の整備、器具、苗の育成、管理および集荷に必要な道の整備等に経費がかかるうえ、漆の若芽や樹

皮はニホンジカの好物であるため、防護柵やネットの整備が必要となります。

さらに、漆は植えてから漆液を採取するまでの期間が長いため、植栽地周辺の急激な環境の変化（伐採、裸地化、開発）を避けることが必要となり、近隣の住民や森林所有者の協力が必要となります。

佐治漆復興に向けて開始

佐治漆復活プロジェクトの実施

平成28年に当会の有志5名で佐治漆研究会（山本達夫会長）を発足し、佐治漆の復活運動を始めました。まずは、佐治漆の歴史や佐治漆の特性、播種、植栽方法などの研究から始めました。漆木植栽では、耕作地を確保するのに苦労しました。

平成29年から本格的にプロジェクトに取り組み、漆の種子は蠟に覆われていて、脱蠟しないと発芽しないため、県外の林業試験場の指導書、県外の生産者等より教わりました。



漆木の根を切る分根。タバコの太さの根を15cm間隔で切る



漆の実生の脱蠟。バケツに実生を入れ、漂白剤で脱蠟する

脱蠟方法は、古来のやり方で熱湯によるもの、硫酸によるもの、台所用漂白剤によるものと3方式で行った結果、種子の発芽が優位であった漂白剤による脱蠟が一番効果的で、その種子を播種しました。また、分根^{ぶんこん}といって、2年生苗の根を15cmごとに等間隔に切断し、畑に植え苗木を増やしていきます。

さらに、苗木の管理や漆掻きについては、丹波漆の京都府福知山市夜久野町や備中漆の岡山県真庭

市郷原の先進地を、苗木育成や鳥獣対策（防護ネット）については、阿波漆の徳島県三好市の先進地を訪問し、情報と知識と技術を習得しました。

佐治漆の魅力を地元住民にも

地元住民に理解を得るために、「鳥取市民大学講座」や「佐治町ふるさとまつり」において、佐治漆の歴史、町内分布、DNA鑑定の結果、漆掻きの方法、および佐治漆の全国への生産と流通の変遷等の研究発表をしました。



食害防止ネットの装備

また、佐治漆で塗りあげた漆器や漆掻きの道具なども展示し、地元の小学生の郷土歴史学習として漆掻き作業の見学などを行いました。平成30年からは苗木の育成に専念しましたが、翌年にはシカの食害が深刻化したため、防獣網による対策を講じました。平成31年からは、



佐治小学校の課外授業。漆畑で苗木の観察

計画ですが、シカの食害で枯れた苗木もあるので、現在は100本ほどの漆木が生育している状況です。苗木は、会員所有の梨畑の跡地2aと、地元の住民の畑跡地1aを借りて植栽しています。

令和元年7月から9月末まで、自生する漆木から養生掻きを行い、その漆液を京都産業技術研究所で分析した結果、漆の主要成分であるウルシオールが78・5%と高い数字の結果を得ることができたことよって、「天下一品佐治漆」の品質の良さを確認でき、佐治漆ブランド化に向かって弾

新たに分根を行い、2年ものの苗木を果樹園跡の斜面に植栽することができました。植栽は、漆の実生を脱蠟して直播する方法と、佐治町に残っていた漆木を母木にして、その根を切つて、畑に挿し木する分根の両方を行っています。毎年100本苗木をつくり、それを畑や果樹園の跡地に植栽する

みがつきました。令和2年8月には、漆に親しんでもらうため、地元の小学生を対象に漆塗作品作りのワークショップを、11月には、地元公民館の「さじまつり」で活動報告と同時に佐治漆と佐治和紙を使った新しい作品の展示を行い、住民等に広く理解していただきました。

佐治漆復興に向けての成果

樹齢70年以上の木からも漆を採取することができ、漆掻きの方法を会員以外にも指導できるようになるなど、生産技術が向上しました。また、当会の9名のうち、プロジェクトに取り組み者が1名増えて6名が活動に携わっています。さらに地元小学校の学習発表会に



畑の跡地に植栽した苗木

また、高齢化が深刻になっっている佐治町は、労働力や資金投資に不安があるため、今後、地域お

佐治漆復活プロジェクトは、中国産に98%依存し、極端に欠乏している国産漆の供給量増産の一翼を担うことを目指しています。

＊まとめ
佐治町林業研究会

佐治町の特産品や名物は、「梨」・「佐治谷話」・「佐治川石」・「和紙」・「星」ですが、これらの語尾は共通して「し」がつくため、地元では「5しの里」として、地域の活性化を図っています。今回、当会が中心となって佐治漆の生産活動を復活することにより、漆を6番目の「し」に組み入れ、「6しの里」として地域の活性化を図っていきたいと考えています。

において、児童が漆栽培で得た知識を演劇として発表してくれるなど、児童や地元の方々の関心が向上しました。

佐治漆復興に向けての今後の課題と対応

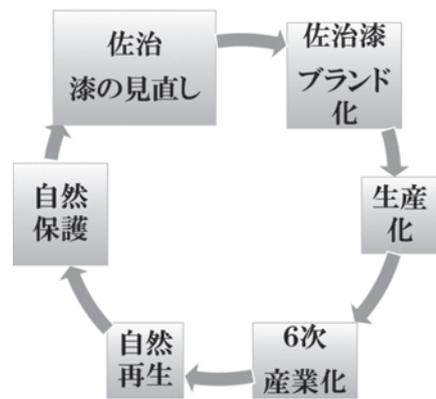
地元では、漆に対して「かぶれ」というイメージもあり、まだ住民に理解されにくい面もあるため、引き続き町内外のイベントや報告会を開催して、漆のすばらしさを普及していきたいと考えています。

休耕田や廃梨園の代替作物として漆栽培を町内に普及することによって、漆林へha当たり500本を目標に植栽していくとともに、雪深い地域などで、雪害に強いシカ柵や防護ネットを導入して、鳥獣害に強い漆林の造成を図りたいと思っています。

佐治漆復活プロジェクトは、佐治漆を持続可能な自然資源として位置づけ、荒廃した山林、田畑を有効活用し、6次産業化させる計画です。

佐治町の特産品や名物は、「梨」・「佐治谷話」・「佐治川石」・「和紙」・「星」ですが、これらの語尾は共通して「し」がつくため、地元では「5しの里」として、地域の活性化を図っています。今回、当会が中心となって佐治漆の生産活動を復活することにより、漆を6番目の「し」に組み入れ、「6しの里」として地域の活性化を図っていき

既存産業とのコラボレーションで6次産業化を目指す



佐治漆の取り組みと既存産業との6次産業化のイメージ図



第2部

山づくり
人づくり
ものづくり
チャレンジ!

事

実践するリーダー

例

けいちく 京築地域の森林・人づくり を実践するリーダー

みやこ 京都森林研究グループ「福岡県」／中川準一さん

京都森林研究グループ（以下、本会）は、福岡県東部に位置する京都府みやこ町で森林保全や後継者の育成等を目的として活動する団体です。この地域では、古くからヒノキの植栽が盛んで、現在「京築ヒノキ」の産地としてブランド化に取り組んでいます。現会長の中川準一さん（72歳）を中心に、前身である犀川町林業研究グループ



中川さん

を再編し、平成19年に再スタートしました。会長の熱心な声かけもあり、現在は24名で活動しています。



高校生の伐倒体験で指導中の中川さん

故郷の森林を 復旧するために 林業の道へ

中川さんは42歳まで北九州市内でトレーニングを経営し、トレーニング指導士の技術を学ぶ

ため渡米（コロラド州アスペン）しました。ロッキーマ脈の麓のアスペンで出会った現地の人々の「本当の豊かさは、自然の中で暮らし、自然を相手に仕事をすること」という一言が、その後の人生を大きく左右することになりました。

帰国後は、みやこ町犀川上伊良原に帰郷し、農業を始めました。しかし、平成3年の台風19号による大きな風倒木災害を目の当たりにし、故郷の森林を復旧するため、林業への道に進むことを決意しました。45歳の時です。林業はゼロからのスタートだったため、右も左も分からない状態でし



京都森林研究グループのメンバー（一番右が中川さん）



高校生の造材体験。
チェーンソーの重さや迫りに驚いた生徒も

林業体験後の高校生からは「体験できて良かった」「感動した」と感想をもらった

高校生の 林業体験 学習

平成22年からは、地元の県立行橋高校環境緑地科2年生を対象に林業体験学習を行っているま

小規模森林所有者や新規就業者が安心して林業経営を行えるよう活動を開始しました。

たが、林業を学ぶため全国の林業先進地を視察し、各地の林業仲間とのつながりもできました。本会との出会いもその時でした。また、「中川林業」という林業事業体を設立し、森林作業の受託や共同利用機械の導入など、

森林・林業を知り、仕事として興味を持ち、将来森で働くきっかけになればと中川さんの強い思いの下、始まったものです。昨年度は搬出間伐の現場で、チェーンソーを使って、伐倒と造材作業の体験を行いました。生徒たちには刺激的な体験だったようで、いきいきと作業に取り組んでいました。中川さんの思いが叶い、卒業後に林業の仕事をしている人もいるということです。

ダム湖畔に モミジを植栽

平成29年度、中川さんの住む地元「伊良原ダム」が竣工しました。本会では、昨年度からダム湖畔にモミジを植栽し、「もみじ街道」（景勝地）づくりに取り組みんでいます。このアイデアは、渡米留学していた時の影響を受けたものです。自然豊かな湖畔での生活に感銘を受け、伊良原ダムを「来訪者との交流の場づくり等に生かしたい」との思いから、取り組み始めました。昨年度は、林研会員と県行橋農林事務所職員のべ37名が植樹活動に参加し、50本を植栽



伊良原ダム湖畔でのモミジ植栽

しました。今年度も50本を植栽し、今後も範囲を広げて植樹を行う予定です。

多彩な経験と人脈を持つ中川さんの新たな取り組みに期待し、このもみじ街道が、将来みやこ町を代表する景勝地になる日を楽しみにしています。

＊まとめ
行橋農林事務所 林業振興課
普及係 技師 武藤周作

事

私たちのチャレンジ！

例

3Dプリンターで 山のジオラマづくり 林業研究グループ「木の駅入口」〔群馬県〕

地元の山をジオラマに

みなかみ町は、新潟県と境界を接する県北部の水源の町です。「木の駅入口」は、里山整備による豊かな自然づくりを目指して活動を始めました。ものづくりや教育などに携わってきたメンバーの経験を活かし、林業の機械化・情報化

に取り組んでいます。

今回紹介する山のジオラマづくりは、地元の山を立体化して尾根筋や沢を見ることができ、ため、

伐採や作業道の検討に役立ちます。

地図情報の取得

基となる地図情報は、国土地理院のWEBサイトからダウンロードします。

ドします。

【作業手順 ※次頁立体地図作成手順の写真参照】

①インターネットで「地理院地図」を開きます。

②目的の場所を画面に出します。地名で検索することもできます。

③場所、表示範囲を確認し、右上にある「機能」↓「3D」から取り込む範囲（大きさ）を選びます。

④しばらくすると、3D地図が得られます。右下の方位、大きさの表示をチェックし、確認します。

⑤マウスを使ってデジタル回転させることができます。

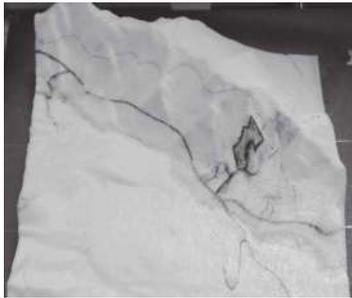
3Dプリンター

ここから先は、3Dプリンター
いろいろな方向から眺めることができます。また、高さ方向の倍率を変えることもできるので、勾配を強調することもできます。

⑥画面下部から「STLファイル」をダウンロードします。



3Dプリンター。「地理院地図」のデータから山のジオラマを作れます



所有林の位置、付近の沢や尾根筋、作業道などを立体物で確認できます



「木の駅入口」のメンバー

でプリントする（樹脂を積層して立体物にする）工程となり、使う3Dプリンターによって操作が異なりますが、基本的にはダウンロードしたSTLファイルを読み込ませてプリントするだけです。

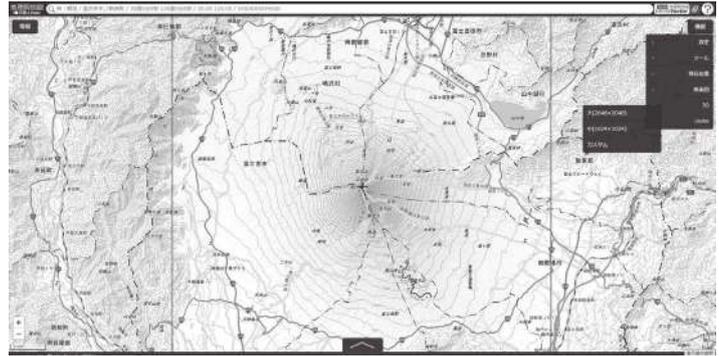
今回使用した3Dプリンターは、キットを組み立てたものですが、完成品も多く販売されているため自分で組み立てる楽しみを味わいたい方以外は、完成品を購入したほうが無難だと思います。

3Dプリンターでは、専用の素材（紐状の樹脂）を溶かして積層する仕組みが一般的です。素材の色は各色あり、機種によっては複数色をあらかじめセットできるものもあります。また、高価ですがインクジェットタイプの多色プリンターもあり、よりリアルに仕上がります。

山のジオラマは、林業用途はもちろん、地域の防災計画の見直しにも役立つと思います。また、イ

木ノ駅入口 代表 阿部一美

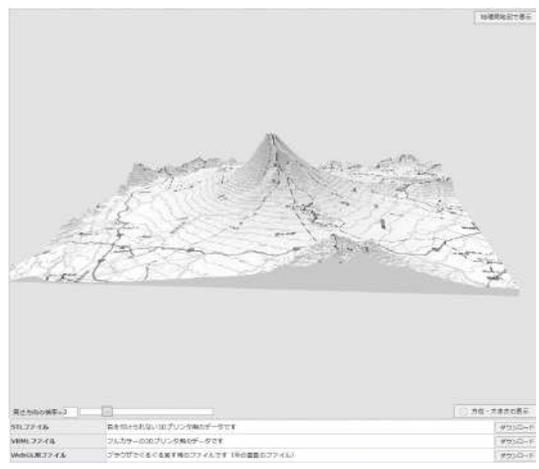
ベントなどのフィギュアを作ってみるのも楽しいので、ぜひ3Dプリンターをお試しく下さい。



WEB サイト「地理院地図」。画面右上の「機能」から3Dの地図を表示できます（下の右写真）



国土院のWEB サイトでも3Dプリンターで山のジオラマ（立体地図）をつくる手順をご覧いただけます
<http://cyberjapandata.gsi.go.jp/3d/>



3D表示（高さ2倍）の画面。画面下から3Dプリンターに使う「STLファイル」をダウンロードできます



完成した立体地図

3Dプリンター 選定の留意点

- 造形可能な最大サイズ
12cm角、20cm角、30cm角、それ以上でおおよそ分かれています。地図を作るには大き目のものが良いでしょう。
- 価格帯
組立式のものなら2万円以下からありますが、最初から失敗なくプリントするためには、5～8万円位の完成品が良いでしょう。消耗品としては1g 2～3円の樹脂材料が要ります。上記の富士山の例では、計算上57gと出ていました。
- 欲しい機能
オートキャリブレーション（高さの自動調整）。樹脂を吐出するノズル部分が簡単に外れるもの。プリンタ周囲が覆われた状態になっているもの。

事

私たちのチャレンジ！

例



市の産業祭での展示販売（平成 18 年）

原木シイタケ 出荷制限の解除へ

なかぬき

中貫しいたけ研究会「茨城県」

原子力発電所の事故による 原木シイタケの出荷制限

「まだ出荷しないの？」

出荷制限を受けて6年。地元の直売所で、消費者からたびたび聞かれた声、制限解除を目指す

励みとなりました。

平成23年3月11日に発生した東日本大震災に伴う福島第一原子力発電所の事故により、土浦市内の原木シイタケから、国の基準値を



栃木県の生産者の取り組みを視察（平成 27 年）

超える放射性セシウムが検出され、同年10月に出荷制限が指示されました。会員が所有していたほど木は全て使えなくなり、無汚染原木の入手も困難な状況に陥りました。そこから対策を実施し、無事に出荷制限解除になるまでの取り組みについて、

紹介します。

昭和46年 発足のグループ

当会は昭和46年に発足しました。会の名称は、会員が保有する森林の多くが土浦市中貫にあることから、地域活性化の願いを込めて付けました。地元の森林をほだ場や原木林として活用し、シイタケの生産を通じて、地



中貫しいたけ研究会の会員一同

域の森林整備に貢献してきました。また、会員同士の技術向上を図り、会員の中から「しいたけ経営管理コンクール」の農林水産大臣賞受賞者を出すなど、高品質なシイタケ生産に努めてきました。中国産生シイタケの輸入増などで経営難の時期もありましたが、消費者交流や販売促進活動に力を入れるこ

とで固定客を増やし、年間約20tのシイタケを出荷してきました。

大分県から原木を 購入し、伏せ込みを工夫

出荷制限を受けた当時は情報が少なく、説明会に出て、種菌メーカーや他の生産者と情報交換して、具体的な対策が分からずに行きました。そこで、普及指導員と勉強会を開き、平成27年11月には対策が進んでいた栃木県の実産者を訪ねるなどして具体的な方法を把握し、取り組みを始めました。

まずは、無汚染原木の入手を種菌メーカーに頼み込み、平成29年



大分県から購入した原木（平成29年）

2月に大分県から2500本の原木を購入しました。わずかな本数ですが、6年ぶりに持った原木はとても重く感じました。地元産の原木より樹皮が厚く、キノコの収量が心配で、通常よりも多く植菌しました。また、伏せ込みでは枕木や防草シートを設置し、ほだ木が地面に直接つかないようにしました。



原木を地面につけないように植菌（平成29年）



発生したシイタケ（平成30年）

7年ぶりの 出荷

平成30年2月にほだ木を、9月にキノコを検査した

結果、ともに基準値を大きく下回ったため、これまでの管理状況をまとめて、10月に出荷制限の解除を申請しました。その結果、同年12月に事故から7年の歳月を経て、会員4名全員の出荷制限が

解除されました。早速、付き合いのある販売先に連絡し、年明けに販売することができました。待っていてくれた消費者に伝えることができ、頑張りが報われた思いでした。

無汚染原木の確保や、原木林の放置による大径木化と里山の荒廃など、課題は山積していますが、今後も安全な原木シイタケの実産を模索しながら、地元の森林整備につなげたいと考えています。

*まとめ

会長 久松 完



直売所での販売再開（平成31年）

事

私たちのニューフェイス

例

一緒に山を歩いてくれた父に感謝。 Uターンで山を継ぎ、林研に加入

とぎ
富来林業研究会「石川県」／大瀧俊定さん

富来林業研究会は、石川県能登半島の中程で日本海側に位置する羽咋郡志賀町で活動しているグループです。会員は8名(うち女性部4名)と小人数ですが、「明るく楽しく」日々活動しています。

20年ぶりの帰郷 父に教わった林業

本会に、平成30年5月に加入した大瀧俊定さん(49歳)を紹介します。大瀧さんは、中学3年生の時、お父さんの故郷である、こ志賀町に生まれました。高校卒業後に、林業とは関係ない分野に進学、就職し、東京での生活が続いた後、お父さんが亡くなられたのを機に平成28年11月に志賀町に戻り、林業を継ぎました。中学3年から高校3年までは、日曜、祝日、夏休み、

春休みにと、お父さんと一緒に朝から晩まで山に行き、下刈り、植え付け、除伐、間伐などをしていました。当時を振り返り、「まさか、数十年後に自分が林業をやるとは思わず、無我夢中で作業

していたのを覚えています」と大瀧さん。市場にも行き、良質木の見分け方も教えてもらったそうです。

「今思うと、林業をやるための基礎だったんだなあ」と、改めてお父さんに感謝しています。



大瀧さんが所有する40年生のスギ人工林。先代が育てたスギを平成30年に1年かけて自ら枝打ちを実施

林業研究会へ加入 自身の山を遊び場 として開放

志賀町に戻ると決めたとき、大瀧さんのご両親と普段から交流のあった私(筆者)と会



県林研主催のドローンフォレストサポーター研修に参加。日本航空高等学校(輪島市)との共同開催



大瀧俊定さん

大瀧さんが、今一番感じていることは、戦後植林され伐採適期を迎えている木を何とかしたいということ。もちろん、木の相場や需要と供給のバランスも考えな

計画的な出材も視野に

話をする中で、林業を継ぎたい、林業についてもっと知りたいという思いが募ったそうで、大瀧さんは本会への加入を決めました。本会では、地域内外の子どもたちを対象とした自然林業体験、木工教室、もちつき、川遊びなどを行っています。大瀧さんは積極的に参加しています。所有林を開放し、子どもたちの活動場所として提供している大瀧さんは子どもたちからも慕われています。



所有林を子どもたちに解放し、自然林業体験の場として提供。子どもたちからも慕われています

くてはいけません。それに、近年の凄まじい雨量に対して、森林の持つ水源涵養・土砂災害防止といった多面的機能が十分に発揮されなければなりません。まず、森林の早期健全化が大事で、伐採適期林の主伐とその後の再造林も必要と感じています。「自分の山にも新たに林道ができ、木を出す目途が立つたので、今後、計画的に出材を考えていきます」。

ドローンによる 森林資源管理の可能性

先般、県林研主催で行ったドローンフォレストサポート研修にも参加しました。個人でドローンを所有して、森林資源の管理に使うことは難しいかもしれませんが、森林組合なら可能性はあります。ドローンを導入し、林家へ

「あの山の木が伐採時期を迎えます」とか、後継者が何も分からなくても「先代は、ここをやっています」など、ドローンで撮った映像で具体的に説明してもらえると大変心強いと言っていました。

大瀧さんは、地元で農業に励む弟さんとも一緒に山林の手入



ドローンから撮影した映像の試写会。林業での活用が期待されることを認識

れをしています。また、農業大学で勉強中の息子さんとも将来は一緒に林業をできることを夢見ています。「今は、やるべきことをやり、父が私たちにしたように、息子たちを山に連れて行き、いろいろな体験させたい」と熱く語ります。これから、本会の中心となつての活躍が期待されます。

*まとめ

富来林業研究会

女性部 山本洋子

事

私たちのチャレンジ!

例

出張イベント 「ふるさとあつたか便」

阿武町^{あむちょう}林業振興会「山口県」

住民との盛んな交流活動

阿武町は、山口県北部の萩市に囲まれた人口3500人に満たない小さな町です。阿武町林業振興会は、主として阿武町内に在住する森林・林業の愛好者が集まった林研グループで、現在45名で活動しています。活動の特徴は、地域森林資源等を活用して、一般市民との交流活動を盛んに行っている



阿武町紹介パネル (令和元年 中央町商店街)

ことです。

その一環で行っているのが、福岡県北九州市での出張イベント「ふるさとあつたか便」です。都住民の方々に阿武町の農林産物等のすばらしさをPRするとともに、都市の商店街も盛り上げることを目的に、平成12年から、ほぼ毎年1回行っています。

北九州市の商店街で 農産物販売と体験イベント

毎年11月下旬の土曜日に、農林産物等の販売と体験交流のイベントを1日かけて行います。開催前日までに2トトラックに準備した資材を詰め込み、開催当日は、早朝からトラックとマイクロバスで商店街を訪れ、夜は商店街の方々と懇親会をします。とても大変

ですが、楽しみや、やりがいも多いイベントです。

平成12年から29年までの18年間は、八幡西区(黒崎)の熊手銀天街等で開催しました。町特産のハクサイ、ホウレンソウ、生(乾)シイタケ、マツタケなどのほか、その場で食べられる、なめこ汁、松茸ごはんなども販売しました。



「こども商店街」に参加した小学生と (平成24年 熊手銀天街)



「ふるさとあつたか便」平成23年(熊手銀天街)の参加メンバー

また、つるかご作り体験、糸ノコ体験などの体験交流も行いました。熊手銀天街では、年々人気が定着し、特に平成24年には、小学生が商店街内の各店舗で職場体験を行う「こども商店街」というイ



農産物等の販売（令和元年 中央町商店街）

ベントとあわせて開催しました。本会が出店した店舗に小学生を受け入れ、子どもたちの威勢の良いかけ声に、本会の会員も笑顔と元気をもらい、一緒に楽しく、たいへん盛り上がりました。

熊手銀天街の商店街メンバーが高齢化し、受け入れが難しくなっ



販売商品（マツタケ、松茸ごはん）（令和元年 中央町商店街）

たため、令和元年からは、八幡東区の中央町商店街に場所を変えて開催しました。初めて開催したせいか、通行する人は、最初警戒ぎみな様子で、マツタケでさえ見向きもされませんでした。「阿武町ってどこ？」と聞くお客さんが多く、また「ここは閉店する店舗もあり、土日も人通りは少ない」との声も

聞かれました。

しかし、時間経過とともに、「ホウレンソウ、きれいですね」などと言葉をかけてくれるようになり、15時の終了時間までには、かなり



交流体験（糸ノコ体験、つるかご作り体験）（令和元年 中央町商店街）

売ることができました。また、夜の懇親会では、地元商店街の方々と大いに盛り上がり、今年も継続する予定でしたが、新型コロナウイルス又感染予防対策のため中止することになりました。残念ですが、来年以降の開催を目指し、準備を進めていきます。

商店街の活性化にもつなげたい

消費者は、駐車場が整備された郊外の大型店等に流れる傾向が続いていて、駅近くの商店街は、寂しくなる一方です。「ふるさとあつたか便」により、自分たちだけでなく、商店街も活性化させるお手伝いができたらと思います。

会員一同、チャレンジを続けていく予定です。

＊まとめ

阿武町林業振興会 西村拓史

事

私たちのチャレンジ！

例

里山のあらゆる材を 売れる商品に！

特定非営利活動法人バイオマス丹波篠山「兵庫県」 たんばささやま

人工林率は3割弱

バイオマス丹波篠山は、森林の多面的な有用性や里山の魅力を発信し、持続可能な森林の育成と地域社会の形成を理念に、丹波篠山市を中心に活動している団体です。

丹波篠山市の森林面積のうち人工林は3割弱で、薪炭林として活用してきた広葉樹林や丹波地域特産のマツタケ山が多く残され、マツ林を含めた二次林が約7割を占

めています。しかし残念なことに、近年では薪炭林の利用はほとんどなく、松くい虫の被害で地域産マツタケは貴重品となり、里山の整備もされなくなっていました。

日本一小規模な ペレット製造に チャレンジ

そうした状況を打破するため、丹波篠山市の補助を受け木質

ペレット製造機

(ペレタイザー)を導入し、日本一小規模な木質ペレット工場を平成24年に設置しました。そして、木質ペレットの原材料



薪にするには難しい広葉樹材をペレットに

を調達するため、地域内2カ所に集材所を設置し、そこに材を持ち込めば、軽トラック1台分につき市内加盟店で利用できる地域通貨2000円分と交換できる「丹波篠山木の駅プロジェクト」を開始しました。

木の駅に持ち込まれるのは、ネジキ、リヨウブ、ホオノキ、カシ、クリ、コナラ、アベマキ、ヤマザクラなどです。間伐事業で伐採した木も含め、平成30年度にやつとトータルで原木調達量100tを達成しました。軽トラおよそ300台分です。その原木を利用して年間60t程度のペレットを生



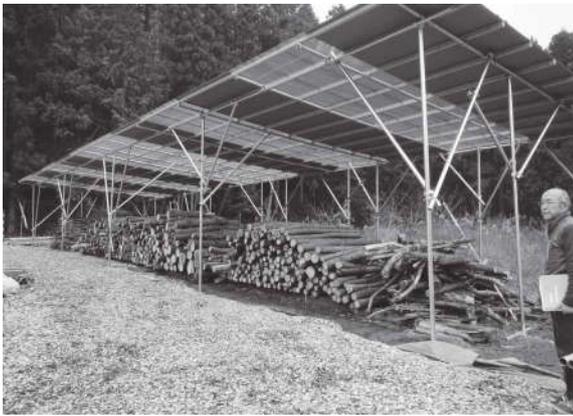
グループのメンバー



木材をペレットに加工する機械「ペレタイザー」



八百材舎と「丹波篠山木の駅」のストックヤード（後方）



「丹波篠山木の駅」のストックヤード

八百屋と呼ばれてきた野菜の専門店には多様な野菜が並べられています。それを踏まえ丹波篠山の里山の多様な樹種や形態のサトヤマ資源を造園業界、生け花需要家、アロマ抽

＊まとめ
特定非営利活動法人
バイオオマス丹波篠山
代表 高橋隆治

「木使い」ができる社会が「気遣い」になることを信念とし、今後の活動を進めていきたいです。

里山の木質資源の販売拠点「八百材舎」

産し、地元の入浴施設や市役所、市内外の個人の方へも販売しています。現在生産規模の拡大を検討しています。

丹波篠山木の駅のストックヤードには、平成30年に県や市の支援を受け、簡易屋根を設置しました。原木を良好に保管できるようになり、チェーンソー製材などの手を加え、若干ですが、原木販売ができるようになりました。

ストックヤードにも、木質ペ

レットの集材所と同じく多様な広葉樹が地域から集まってきます。ただ、スギ、ヒノキのように同じ形態をした木は少なく、搬入される広葉樹の多くが大径木のため、木質ペレットにするには通常の薪割機では歯が立たず、チェーンソーで切断する手間がかかります。薪にして販売するにも、こぶやねじれがひどく、見栄えも悪く売れにくいという厄介者でした。

そんな中、平成30年にとある会合で「山林資源を都市部へ流通させたい」という若者と出会いました。原木丸太、枝、中古材、枯れ



アカマツの薪販売（焼物の窯の燃料として）



クロモジエッセンシャルオイル（材料を市内の工房へ販売）

枝や落ち葉を主体とした腐葉土など、多様な木質資源を販売したい

ということ、お互いの

思いに共感し、バイ

オマス丹波篠山が集め

た木質資材を販売する

「八百材舎」を設立す

ることにしました。

八百屋と呼ばれてき

た野菜の専門店には多

様な野菜が並べられて

います。それを踏まえ

丹波篠山の里山の多様

な樹種や形態のサトヤ

マ資源を造園業界、生

け花需要家、アロマ抽

とも記憶に新しいところです。

簡易製材機などを設置し用材販

売も考えていますが、まだまだ需

要を掘り起こす必要があります。

「木使い」ができる社会が「気遣い」

になることを信念とし、今後の活

動を進めていきたいです。

＊まとめ

特定非営利活動法人

バイオオマス丹波篠山

代表 高橋隆治

事

私たちのチャレンジ！

例

苗木生産研修会を開催 やつしる林業研究グループ「熊本県」

農林業が盛んな八代地域

熊本県八代市は、県の中央部にあり、東には宮崎県に隣接し九州山地に連なる深い山々、西には八代海に面する広大な八代平野が広がり、昔から農林業がとても盛んな地域です。八代地域には多い時は7つのグループがありましたが、平成26年に6つのグループが統合

して「やつしる林業研究グループ」が発足しました。

現在は、林業事業体や森林組合職員、民宿の女将さんなど20名の会員が活動しています。高齢化とともに会員も減ってきていますが、林業担い手育成のための県立八代農業高校泉分校生への林業体験活動をはじめ、女性会員によるイベントや研修会を通じた



造林地。管内では毎年度 70～100ha 植栽されている



視察研修。森林総研林木育種センター九州育種場では、エリートツリーの成長の早さに驚き



研修会（座学）。多くの関係者が参加



現地研修に参加した本グループ会員と関係者との集合写真

他地域との交流など、統合前から単位グループで実施していた活動を継続し、今も積極的に取り組んでいます。

**地域の苗木不足を
解消するために**

そんな中、平成30年度から苗木



現地研修。管内の苗木生産者から穂の採取についてアドバイスを受ける

生産に関する研修会を行っていません。その背景には、近年の大規模な森林伐採の増加と跡地への植栽による苗木不足があります。計画した植栽ができず、森林所有者や林業事業者が困った状況になったのです。

苗木不足は、地域林業にとって大きな問題です。地域に貢献したいという思いから多くの関係者に呼び掛け、苗木生産量を増やすための取り組みとして「苗木生産研修会」を開催し、座学、視察研修、現地研修を1日ずつ行いました。市町や森林組合をはじめ苗木生産者、林業事業者、また嬉しいこと



現地研修。これまでの研修を振り返りながら、自分たちで穂を採取

に林建連携に取り組む建設業の参加もあり、平成30年度は延べ58人が参加しました。

まずは座学で、苗木の生産技術や優良事例（菊池市水源林研のリユウノヒゲ生産）に関する取り組みを学び、次に県内生産者の苗畑と森林総研の林木育種センターを訪問し、苗畑やコンテナ苗、採穂園の管理状況を学びました。そして、これらの研修を振り返りながら自分たちで採穂と挿し穂の体験をし、管内生産者の苗畑で意見交換を行いました。

令和元年度も苗木生産に必要な知識を得るため現地研修と視察研修を行い、延べ49名が参加しまし



現地研修。自分たちで育てた苗床に穂を挿す

業者が生産者から直接アドバイスを受けたりされています。また、研修に参加した林研グループ会員をはじめ、関係者から林業種苗生産事業者講習受講者が5名、そのうち4名が林業種苗生産者として登録しました。少しずつですが成果が形になっていくことで、今後の取り組みへの意欲が湧いてきます。

研修会による新しい繋がりと成果

このように、地域の課題に向き合ってきた「苗木生産研修会」ですが、現在の一番の成果は、関係者間の新しい繋がりができた事です。研修を通じて顔馴染みとなり、苗木生産を始めたという建設

が湧いてきます。

これからも関係者と連携しながら地域の課題解決に向けて取り組むとともに、八代地域唯一の林研グループとして情報を発信していきます。

*まとめ

県南広域本部農林水産部林務課
 参事 草野静代

事

私たちのチャレンジ！

例

ハイバチの飼育・販売

つげちちよ
付知町優良材生産研究会「岐阜県」

持続可能な人づくり・
森林づくりを目指して

「木曽路はすべて山の中である」

島崎藤村の『夜明け前』で知られている木曽路の西側、裏木曽と呼ばれる一帯に位置する中津川市付知町は古くから林業をはじめ、木造建築、木工など木を中心とする産業で栄えてきました。

付知町優良材生産研究会は、昭和38年に設立され、会員は40名で今年から2名の女性も加入しまし

た。本会では次代へ森林の大切さを伝える「持続可能な人づくり・森林づくり」を目標に活動をしています。

当初は造林作業の研究が中心でしたが、多面的な活動に方向を変え、小・中学生への森林環境教育と記念植樹、地域イ

ベントへの協力、地域へのボランティア活動など町づ



ハイバチ（クロスズメバチ）。初夏に山林でエサを仕掛け、寄ってきたハチに目印をつけて後を追ひ、巣を探します



巣箱に移した直後だけ、鶏肉、砂糖水などのエサを与えます。天井には箱内に熱がこもらないように砂利を敷きます



巣の場所がわかったら掘り出し、巣をハチごと巣箱に移します



付知町優良材生産研究会の会員（一部）

くりや後継者育成の視点で活動をしていきます。しかし、グループの想いを実現する持続可能な運営のためには活動が自由にできるための財源を確保する必要があります。新たに、ハイバチの飼育と販売、木



大きくなった巣を巣箱から取り出し、巣から蜂の子（幼虫）を採ります

「蜂の子」 郷土の高級珍味

ハイバチとはクロスズメバチの

の駅プロジェクトへの参加と事務受託、体験型ツアーイベントや森林環境教室の開催、マイタケの原木栽培などに取り組み始めました。今回は、平成29年から始めたハイバチの飼育と販売についてご紹介

します。

ことですが、地区によってはへボなどいろいろな呼び名があります。ハイバチの飼育は、主に中部地方の一部で行われており、6月頃からハチを追いかけ、見つけた野球のボールほどの小さな巣を持ち帰り、木で作った巣箱で飼育（囲う）します。大事に育てた巣は10月の下旬頃にはバスケットボール以上に大きくなります。その巣から蜂の子を取り出し、調理して食



郷土料理の朴葉寿司

べます。

蜂の子を砂糖、醤油、酒、みりんと一緒に煮るだけの比較的シンプルな調理で、おかずや朴葉寿司に入れたり、混ぜご飯にしたりします。

地区や家庭により、成虫になりかけのものを入れる割合や、生姜を入れるなど調理方法が少しずつ異なります。

また、この地域では珍味「蜂の子」として道の駅や産直にて高額で販売されているほか、育てた巣の大きさ（重さ）を競う「ハイバチ

コンテスト」も盛大に開催されています。

林業グループでのハイバチ飼育の目的には、ハイバチはササや下層木が生える日の差し込む健康な森林にしか巣を作らないこともあり、そんな森林づくりへの想いも込めています。収穫は年により異なりますが、2〜3kgの巣を4個ほど育て、1kg当たり1万円

で販売しています。

グループではいろいろな事業を行っていますが、課題としては新規事業が未知数であり、まだ補助金に頼らなければ多くの事業ができないことも現実です。持続可能な林業グループとして活動するには補助金と自主財源のバランスを考えた運営・経営をしていくことが大事だと感じています。

*まとめ

付知町優良材生産研究会
会長 三浦八郎

事

私たちのチャレンジ！

例



ブランド「九度山の木炭」で販売



「さえもん」で販売される切炭と敷き炭

くぐりやまじゅうり
九度山町東部林研グループ「和歌山県」

「炭焼き」やっています！

年間600〜700kg
の黒炭を生産

九度山町東部林研グループは、和歌山県北東部の富有柿の産地である伊都郡九度山町で昭和53年に結成され、現在の会員は12名です。

主な活動として、町内の小学生を対象に森林・林業教室による間伐や丸太切り体験などを通じて、森林を肌で感じ、森林・林業の大切さや大変さを実感してもらう学習に取り組んでいます。

また、年1回（1〜2月頃）地元の森林所有者の山林から炭の原木となるカシやクヌギ等の伐採の了解を得て、毎年約600〜700kgの黒炭を焼き、九度山町農林総合研修センター「さえもん」や九度山町内のふるさと産品直売所

で、切炭2500円

／10kg、1250

円／5kg、敷き炭

1500円／10kg、

茶炭1300円／箱

詰め5kg、450円

／ネット詰め2kgな

どを販売しています。

黒炭は、軟らかく着火しやすいため、夏場の玉川溪谷に訪れるキャンプ客などに非常に人気が高く、また、火力が強くて、観客の土産物や地元

の人の生活用品としても利用され、好評を得ています。

「山づくりの思いが生んだ 九度山の木炭」

結成当初は、植栽・下刈り・枝打ち・間伐を中心とする山づくり



九度山町農林総合研修センター「さえもん」に隣接する炭窯

の研究を通じて会員同士の交流を図り、地域林業の発展に努めてきましたが、時代の変化とともに林業が低迷し、林業従事者も減少してきました。そんな中、山づくりの思いをもう一度取り戻すため、



原木集積



チェーンソーで短く切り揃える



クサビを打ち込んで半割り

昭和61年に新たな事業として当地域で盛んであった炭焼きの復活を目指し、町管理のもと、「さえもん」の隣に炭窯を築きました。

炭焼きは、「間伐後に切り捨てられた木をどうにかして有効活用できないか」という会員の声から始まり、育てた木はそれに見合う使われ方をしてほしいという会員の願いが込められています。炭を焼くからには、できる限り多くの人に木炭を使ってもらえるように、特に品質にこだわり、原木調達から焼き上げまでの全工程を九度山町内で行い、完成した木炭を地元ブランド品「九度山の木炭」として販売することにしました。

ベテランと若手の会員が協力して良質な炭を生産

原木の調達は会員自らが行っていましたが、近年、会員の高齢化が進んでいるため、数年前から原木の伐採から窯場までの運搬作業を地元の森林組合に委託しています。原木も大径化したものが多いため、原木の移動やクサビを利用した半割作業に特に労力を費やすものの、本会の会員と事務局あわせて16〜17名が作業分担し、窯入れまでを1日で行っています。

作業は、炭焼き経験豊富な本会のベテラン会員の指導のもとで行いますが、窯入れ後の窯の管理は、

若手の会員が毎日煙の状況を確認し、消火時期を見定め窯出しを行っています。また、窯出した炭は、窯底の方の5cm程度を切り落とし、良質なものを厳選しています。

「さえもん」には、木酢液は販売していないかとの問い合わせもあることから、今後は木酢液の生産活動についても考えていきたいと思っています。

これからも、この炭焼きを通して会員同士の交流を図るとともに、皆さんに喜ばれる品質の高い木炭を提供し、木材の有効な利用促進や山村地



茶炭（上）と切炭（右）



域の振興に繋がるよう一層取り組んでいきたいと思っています。

*まとめ

九度山町東部林研グループ
事務局 中岡生尚

事

私たちのチャレンジ！

例

コンテナ苗の生産・出荷

東黒川林業研究グループ「佐賀県」

林業研修センターの 施設管理を行う

伊万里市黒川町には、平成8年に伊万里市が林業構造改善事業により建設した「林業研修センター」

があり、林業者の研修や町民の集會等の活動拠点となっています。

東黒川林業研究グループ（以下、「本会」）は、林業研修センターの設立に合わせ、「後世に残せる山づくり」を目指して発足しました。

林業研修セン

ターの施設管

理を行いな

ら、ここで、

子どもたちへ

の木工教室や

若者への技術

講習会などを

開催していま

す。

本会は、会

員の高齢化、

若者への林業

技術の継承、

伐期に達した

森林の伐採と

更新、という

3つの課題に取り組

んでいます。伐採

後の更新に向けて近

年新たに始まった、

コンテナ苗生産の取

り組みについて紹介

します。

一貫作業

システムの視察が
きっかけに

本会会員の所有林

は、森林組合等の林

業事業体への施業委

託により森林経営を

展開しています。併せて、先進的

な林業経営について知見を深める

ため、定期的に林業先進地視察研

修を実施してきました。

新たな取り組みの契機になった

のが、平成29年の佐賀市富士町へ

の視察研修です。そこでは、誘導

伐施業地内での素材生産と造林の



コンテナ苗技術研修を開催

一貫作業システムを勉強しました。その施業で採用されていたコンテナ苗の植栽に会員の関心が集まり、この研修をきっかけに、造林用苗木の生産に取り組む活動が生まれたのです。

育苗中のコンテナ苗



それ以降、伊万里市内の苗木生産者を招いた苗木生産技術研修や県内のコンテナ苗の生産現場の視察研修を重ねてきました。こうした中、コンテナ苗の生産に実際に取り組む会員が現れました。この会員は、お茶栽培という他業種から新たに造林用苗木に取り組み始め、自身も宮崎県のコンテナ苗生産の現



活動拠点の林業研修センター。平成8年築



素材生産・造林一貫作業システムを勉強

資材や培地基材の選定、肥料の配合等、苗木を生産するために高度な技術とノウハウが必要です。研修では、苗木生産者と参加者との間で、実際に苗木生産を行っている上で問題となる点を中心に、熱心に質疑応答がなされました。こうした研修を通して、今後ほかの会員にも取り組みが広がってほしいと考えています。

研修を行った会員の圃場では、今年の春に初めての山行き苗木7000本出荷されました。

◆ 私たちは、これまでの活動を通して、「後世に残せる山づくり」

場に赴いて勉強を重ね、去年から本格的に造林用のスギのコンテナ苗の生産に着手しました。

**コンテナ苗
7000本を初出荷**

令和元年7月には、会員のコンテナ苗の生産圃場を利用して、苗木生産の技術研修を行いました。コンテナ苗の生産には、コンテナ



穂を挿し床に挿し、発根を促す



挿し床からコンテナへ移植

のために今、何ができるのか、次につなげるには何が大事なのか考えてきました。確信できたことは、これまでの活動を継続していくこと、若者を活動に取り込み、組織の若返りを図ることです。今後とも会員同士で知恵を出し合いながら、結成当時の熱い想いを忘れず、地域の活性化に取り組んでいきたいと思えます。

＊まとめ
東黒川林業研究グループ
梶原敏雄

事

私たちのチャレンジ！

例

桜の葉と花で商品開発

一関地方森林組合室根婦人部 はなみずきの会「岩手県」

結成から40年間
楽しく活動

岩手県の南東部、宮城県境に位置する一関市室根町（旧東磐井郡室根村）は、「室根林業」という言葉があるほど林業に対する関心が高い地域です。

一関地方森林組合室根婦人部は、はなみずきの会は、「婦人林業教室」

をきっかけに昭和56年8月に結成され、「気楽に、楽しく、背伸びせず、できることを！」をモットー

に活動を続けています。林業の知識や技術を身につけるための研修や視察のほか、どくだみ水や藤細工、きのこまんじゅうなどの商品開発や販売を行ってきました。平成30年からは、桜の葉と花を活用した商品開発に取り組んでいます。

オオシマザクラの 植栽と獣害対策

和菓子に使われる桜の葉は、香りの強いオオシマザクラが原料で、

国産のほぼすべてが静岡県で生産されていますが、県内の和菓子業者からは、岩手県産が入手できれば、学校給食用を中心に



道の駅で販売している桜葉まんじゅう



植栽地の状況。短く剪定した苗木からは多数の萌芽枝が発生



林業普及指導員が亀甲金網の巻き付け方を指導（令和2年6月）

使用したいという声もあります。そこで、平成31年3月に、高さ1.5mのオオシマザクラの苗木25本を県内の苗木業者から購入し、会



はなみずきの会のメンバー

員の自宅そばの遊休地に植栽しました。

すべての苗木が活着したものの、一部にシカによる幹の傷がみられたので、令和2年の5月から6月にかけて獣害対策を実施しました。



桜葉料理の試作会（令和2年2月）



会で作ったオオシマザクラの葉の塩漬け（左）。試行錯誤の末、葉の苦みを和らげることに成功。右は会で作ったヤエザクラの花の塩漬け。花は会員の知人宅から採取（室根産）

そこで、この桜葉入りまんじゅうの改良と試作を重ね、「桜葉まんじゅう」という名前を、3月下旬から道の駅の産直で販売を開始しました。価格は1個110円（税込み）で、毎週土曜日に30〜35個を販売しています。生地、材料や配合など何度も失敗を繰り返しながら商品化にこぎつけ、今では完売するほどの人気商品

岩手県南広域振興局農政部
一 関農林振興センター
上 席 林 業 普 及 指 導 員
木 戸 口 佐 織

＊まとめ

今後は、オオシマザクラの栽培管理を続けながら徐々に栽培規模を拡大し、和菓子店への桜葉漬けの供給を目指すとともに、桜葉まんじゅうに続く新商品の開発にも取り組むたいと考えています。

「桜葉まんじゅう」の開発・販売

昨年からは、オオシマザクラの葉とヤエザクラの花の塩漬けに

5月には、被害木を根元から剪定し、6月には健全木の幹に亀甲金網を巻き付けました。
食用なので薬剤を使わずに防除したいという相談を受け、一関農林振興センターの普及指導員が考えた方法で、今のところ被害はみられません。



試作した料理。桜葉入りまんじゅう（左）、関西風桜餅（中央）、関東風桜餅（右）

取り組み始めました。また、商品開発の第一歩として、市販の桜葉漬けと、会で作った花の塩漬けを使った桜葉料理の試作会を令和2年の2月に開催しました。試作した中で商品化の有力候補となったのが、刻んだ桜葉を生地に練り込み、あんこを包んで、桜の花の塩漬けをトッピングしてふかした桜葉入りまんじゅうです。



桜葉まんじゅう。葉と花の塩漬けの塩味がアクセント

令和2年度多様な担い手育成事業 実施グループ一覧

グループ名	活動内容	対象学校
北海道	★北海道林業グループ協議会（8頁）	高校生等の林業就業促進支援
宮城県	★仙南フォレストクラブ（12頁）	高校生等の林業就業促進支援
秋田県	北秋田森林・林業振興会	高校生等の林業就業促進支援
山形県	庄内林業研究会	高校生等の林業就業促進支援
福島県	福島県林業グループ連絡協議会	女性林業者への安全研修会の開催、林業グループ活動等への支援
茨城県	茨城県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援
栃木県	栃木県林業振興協会	高校生等の林業就業促進支援
群馬県	★NPO法人人口ガイズ（36頁）	林業グループ活動等への支援
埼玉県	埼玉県森林協会林業研究グループ部会	高校生等の林業就業促進支援
千葉県	★千葉県林業研究グループ連絡協議会（16頁）	高校生等の林業就業促進支援
神奈川県	なかい里山研究会	林業グループ活動等への支援
石川県	能登町林業研究クラブ	高校生等の林業就業促進支援、女性への林業就業の働きかけ
	富来林業研究会	高校生等の林業就業促進支援
	河北郡林業研究会	女性林業者への安全研修会の開催
富山県	富山県林業研究グループ協議会	高校生等の林業就業促進支援
山梨県	★山梨県林業研究グループ連絡協議会（20頁）	高校生等の林業就業促進支援
長野県	長野県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援
	南信州林業研究会	高校生等の林業就業促進支援
	木曾林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援
	長野市中条地区林業研究グループ	高校生等の林業就業促進支援
	北信州の森林と家をつなぐ会	高校生等の林業就業促進支援
	四賀林研グループ	林業グループ活動等への支援
岐阜県	高根町林業改良クラブ	高校生等の林業就業促進支援
	加子母優良材生産クラブ	高校生等の林業就業促進支援
	付知町優良材生産研究会	林業グループ活動等への支援
愛知県	愛知県森林協会林業研究グループ分科会	高校生等の林業就業促進支援
	猿投田農林高校	
	飛騨高山高校	
	森林文化アカデミー	
	下高井農林高校	
	長野西高校中条校	
	木曾青峰高校、県林業大学校	
	下伊那農業高校	
	桜井高校	
	山梨県立農林高校	
	県下全高校	
	志賀高校	
	能登高校	
	君津青葉高校	
	秩父農工科学高校	
	鹿沼南高校、宇都宮大学	
	大子清流高校	
	岩見沢農業高校、旭川農業高校、帯広農業高校	
	柴田農林高校、白石高校七ヶ宿校	
	秋田北鷹高校	

令和2年度多様な担い手育成事業
実施グループ一覧

グループ名	活動内容	対象学校
愛知県指導林家連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援	田口高校
★額田林業クラブ(40頁)	林業グループ活動等への支援	
三重県	高校生等の林業就業促進支援	久居農林高校
★三重県林業研究グループ連絡協議会(24頁)	高校生等の林業就業促進支援	北桑田高校
京都府	高校生等の林業就業促進支援	
京都府林業研究グループ連絡協議会	林業グループ活動等への支援	
樹々の会	高校生等の林業就業促進支援、 林業グループ活動等への支援	りら創造芸術高校、南部高校龍神分校等
和歌山県	高校生等の林業就業促進支援、 林業グループ活動等への支援	
和歌山県林業研究グループ連絡協議会 女性林研部会	林業グループ活動等への支援	
鳥取県	女性林業者への安全研修会の開催、 女性への林業就業の働きかけ、 林業グループ活動等への支援	真庭高校久世校地
★佐治町林業研究会(44頁)	高校生等の林業就業促進支援	
鳥根県	高校生等の林業就業促進支援	
★特定非営利活動法人もりふれ倶楽部(32頁)	高校生等の林業就業促進支援	
岡山県	林業グループ活動等への支援	
岡山県林業改良普及協会	林業グループ活動等への支援	
岡山県林業未来会	高校生等の林業就業促進支援、 女性林業者への安全研修会の開催、 女性への林業就業の働きかけ、 林業グループ活動等への支援	山口農業高校、萩商工高校、大津緑洋高校
山口県	高校生等の林業就業促進支援、 女性林業者への安全研修会の開催、 女性への林業就業の働きかけ、 林業グループ活動等への支援	城西高校神山校
★山口県林業研究グループ連絡協議会(28頁)	高校生等の林業就業促進支援、 女性林業者への安全研修会の開催、 林業グループ活動等への支援	西条農業高校、伊予農業高校、上浮穴高校
徳島県	高校生等の林業就業促進支援、 林業グループ活動等への支援	八女農業高校、行橋高校
徳島県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援	
愛媛県	高校生等の林業就業促進支援	
愛媛県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援	
福岡県	高校生等の林業就業促進支援	
福岡県林業研究グループ連合会	高校生等の林業就業促進支援	
熊本県	高校生等の林業就業促進支援	
上益城地区林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援	矢部高校
八代地域林業研究・普及連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援	八代農業高校泉分校
芦北地域林業研究グループ	高校生等の林業就業促進支援	芦北高校
球磨地区普及・林研グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援	南陵高校
菊池地区林業研究グループ連絡協議会	林業グループ活動等への支援	
阿蘇広域林業研究会	林業グループ活動等への支援	
宮崎県	高校生等の林業就業促進支援	
宮崎県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援、 女性への林業就業の働きかけ、 林業グループ活動等への支援	伊佐農林高校
鹿児島県	高校生等の林業就業促進支援	
鹿児島県林業研究グループ連絡協議会	高校生等の林業就業促進支援	薩南工業高校
知覧町たけのこ振興会	高校生等の林業就業促進支援	

★は、本情報集第1部で紹介しているグループ。グループ名の下に数字は紹介頁をさす。

林業研究グループ連絡協議会 事務局一覧

全国林業研究グループ連絡協議会は、46都道府県の林業研究グループ連絡協議会(一部名称が異なる)を会員とし、傘下には森林所有者および林業に従事する者等を構成員として、森林づくり、人づくり、地域づくりを担っている自主的なグループです。

名 称	郵便番号	住 所	電話番号
全国林業研究グループ連絡協議会	107-0052	東京都港区赤坂 1-9-13 三会堂ビル	03-3583-8407
北海道林業グループ協議会	060-0003	札幌市中央区北 3 条西 7 丁目 北海道水産ビル内	011-261-9022
青森県林研グループ連絡協議会	039-1528	三戸郡五戸町大字浅水字陣場 92-2 三八地方森林組合内	0178-67-2003
岩手県林業研究グループ連絡協議会	028-3623	紫波郡矢巾町大字煙山 3-560-11 県林業技術センター内	019-698-1337
宮城県林業研究会連絡協議会	981-3602	黒川郡大衡村大衡字はぬ木 14 県林業技術総合センター内	022-345-2816
(一社)秋田県森と水の協会 林業後継者部会	010-0941	秋田市川尻町字大川反 170-169 森林環境会館内	018-883-1252
山形県林業グループ連絡協議会	990-2473	山形市松栄 1-5-41 山形県森林協会内	023-666-4331
福島県林研グループ連絡協議会	960-8043	福島市中町 5-18 林業会館内	024-521-3245
茨城県林業研究グループ連絡協議会	311-0122	那珂市戸 4692 県林業技術センター内	029-295-7318
栃木県林業振興協会	320-8501	宇都宮市埴田 1-1-20 県林業木材産業課内	028-623-3274
群馬県林業研究グループ連絡協議会	371-0854	前橋市大渡町 1-10-7 群馬県公社総合ビル 6F	027-280-6254
埼玉県森林協会林業研究グループ部会	357-0212	飯能市井上 138 (有)創林内	042-970-2007
千葉県林業研究グループ連絡協議会	-	(*お問合せは全国林業研究グループ連絡協議会へ)	03-3583-8407
東京都林業研究グループ連絡協議会	190-0181	西多摩郡日の出町大久野 7852 東京都森林協会内	042-597-2881
神奈川県林業研究グループ連絡協議会	243-0018	厚木市中町 2-13-14 サンシャインビル 604	046-240-0500
新潟県林業研究会連絡協議会	950-8570	新潟市中央区新光町 4-1 県林政課経営指導係内	025-280-5326
富山県林業研究グループ協議会	930-0004	富山市桜橋通り 5-13 富山興銀ビル 4 階 県森林政策課内	076-444-3387
石川県林業研究グループ連絡協議会	929-0325	河北郡津幡町字加賀爪ホ 1 湯端良子様方	076-254-5337
福井県山林協会普及部会林研分科会	910-0003	福井市松本 3 丁目 16-10 福井県職員会館ビル 2F	0776-23-3753
山梨県林業研究グループ連絡協議会	401-0305	南都留郡富士河口湖町大石 2123-85 (パシオンローザ内)	0555-76-6656
長野県林業研究グループ連絡協議会	380-0936	長野市岡田町 30-16 林業センター (一社)長野県林業普及協会内	026-226-5620
岐阜県林業グループ連絡協議会	501-3714	美濃市曾代 88 県立森林文化アカデミー内	0575-35-2535
静岡県林業研究グループ連絡協議会	420-8601	静岡市葵区追手町 9 番 6 号 県庁西館 9 階 (公社)静岡県山林協会内	054-255-4488
愛知県森林協会林業研究グループ分科会	460-0001	名古屋市中区丸の内 3-5-16 愛知県林業会館内	052-961-9730
三重県林業研究グループ連絡協議会	514-0003	津市桜橋 1 丁目 104 番地 (林業会館) 林業技術普及協会内	059-228-0924
滋賀県林業研究グループ連絡協議会	520-0801	大津市におの浜四丁目 1 番 20 号 林業協会内	077-522-2318
京都府林業研究グループ連絡協議会	604-8424	京都市中京区西ノ京橋ノ口町 123 京都府森林組合連合会内	075-841-1030
大阪府		(事務局なし)	
兵庫県林業研究グループ連絡協議会	671-2515	宍粟市山崎町五十波 430 森林林業技術センター内	0790-62-2118
奈良県林業研究グループ連絡協議会	636-0202	磯城郡川西町結崎 862-29 衣田雅人 様方	0745-43-1327
和歌山県林業研究グループ連絡協議会	640-8585	和歌山市小松原通 1-1 和歌山県庁林業振興課内	073-441-2991
鳥取県林業研究グループ連絡協議会	689-1311	鳥取市佐治町加瀬木 363	0858-88-0575
島根県林業研究グループ連絡協議会	690-8501	松江市殿町 1 番地 県農林水産部林業課内	0852-22-5153
岡山県林業研究グループ連絡協議会	700-8570	岡山市北区内山下 2-4-6 県林政課内	086-226-7451
広島県林業研究グループ連絡協議会	730-8511	広島市中区基町 10-52 県農林水産局森林保全課内	082-513-4840
山口県林業研究グループ連絡協議会	753-8501	山口市滝町 1 - 1 県森林企画課内	083-933-3460
徳島県林業研究グループ連絡協議会	771-0134	徳島市川内町平石住吉 209-5 (公社)徳島森林づくり推進機構内	088-679-4103
香川県林業普及協会	760-0008	高松市中野町 23-2 香川県森林組合連合会内	090-7626-1788
愛媛県林業研究グループ連絡協議会	791-1205	上浮穴郡久万高原町菅生二番耕地 280-38 県林業研究センター内	0892-21-2266
高知県林業研究グループ連絡協議会	783-0055	南国市双葉台 7 番地 1 高知県森林組合連合会内	088-855-7050
福岡県林業研究グループ連合会	839-0827	久留米市山本町豊田 1438-2 福岡県農林業総合試験場資源活用研究センター内	0942-45-7868
佐賀県林業研究グループ連絡協議会	840-0212	佐賀市大和町池上 3408 佐賀県林業試験場 普及指導課内	0952-62-0054
長崎県林業研究グループ連絡協議会	854-0063	諫早市貝津町 1122 番地 6 林業会館内	0957-25-0177
熊本県林業研究グループ連絡協議会	862-8570	熊本市中央区水前寺 6 丁目 18-1 熊本県森林整備課内	096-333-2441
大分県林研グループ連合会	870-8501	大分市大手町 3-1-1 県林務管理課内	097-506-3823
宮崎県林業研究グループ連絡協議会	880-8501	宮崎市橘通東 2 丁目 10 番 1 号 県森林経営課内	0985-26-7154
鹿児島県林業研究グループ連絡協議会	892-0816	鹿児島市山下町 9-15 鹿児島県林業改良普及協会内	099-223-8550
沖縄県林業研究グループ連絡協議会	900-8570	那覇市泉崎 1-2-2 県森林管理課内	098-866-2295

編集スタッフ—————岩渕 光則
石井 圭子
高橋 香織
吉田 憲恵

レイアウト—————森本 唯

装丁—————クリエイティブ・コンセプト (江森 恵子)

令和2年度
多様な担い手育成事業

森に学び 林業を知る

発行—————2021年3月15日

発行者—————齋藤 正

発行所—————全国林業研究グループ連絡協議会(全林研)
〒107-0052 東京都港区赤坂1-9-13 三会堂ビル
電話 03-3583-8407
FAX 03-3583-8465
webサイト <http://www.ringyou.or.jp/rinken/index.html>

編集—————全国林業改良普及協会

印刷・製本所—————三報社印刷株式会社

Printed in Japan

- 本書に掲載される本文、写真のいっさいの無断複写・引用・転載を禁じます。
- 著者、発行所に無断で転載・複写しますと、著者および発行所の権利侵害となります。

